俺の学校の裏世界

くるみ屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の学校の裏世界

【Ｎコード】
Ｎ９４７２Ｖ

【作者名】
くるみ屋

【あらすじ】
国内最大規模の高校「神騎高校」そこに入学した俺こと相馬優人は一人の女子生徒と出会う。彼女こそこの神騎高校生徒会長、前原夢矢だった
彼女に興味を持たれてしまった俺は強引に生徒会に入れられてしまうそして生徒会長からこの学校の秘密を知らされた俺は次々と学校の「裏」の世界へと入り込んでいく
天使と死神?二重人格?決戦兵器少女?帯刀幼女?巨大ロボ?魔法使い?超人?変態執事?女装男子?戦国最強の子孫?神隠し?勢力

戦争？
わけが分からない「裏」世界の日常が始まる
この小説はｔｈｅ　ｆａｃｕｌｔｙと重複投稿です

「俺の運命を変える出合い」

序章「俺の高校」

神騎高校、それが俺の学校の名前だ。
俺の住んでる町、いや、地方、いや、おそらく日本で一番大きな高校だ。
ただ大きいというわけではない。施設も充実していて教師も一流教師ばかりだ。
しかし決してエリート校というわけではない。
レベル的には並の高校と大した差はなく、進学先としては無理なく受験できる。
実際俺だって大して勉強もしなかったのに推薦で楽に入れたほどだ。
無事高校に入れたのは良かったが、一つ問題、いや、大問題があった。
その原点とも言える入学当時の話を今から話そうと思う。
下らないように思えるだろうが、俺にとってはかなり重要だ。
毎日が戦争と思えるくらいに・・・

ジリリリッジリリリッ
俺の耳に雑音が響いてきた。
睡眠という名の幸せを奪う残虐な破壊兵器だ。
・・・・・すいません嘘です、ただの目覚まし時計です。
だが誰だって目覚まし時計が鬱陶しいと思った試しはあるだろう。
俺のだってこの音はかなり鬱陶しい。だが目覚まし時計は悪くない。

一人で起きることのできない愚かな人間達をその独特な音で起こしてくれる・・・いわば救世主だ。

だから人間達は素直に起きる義務があるのだ

無論俺は素直に起きる、特に今日は。

何故なら今日は神騎高校の入学式だからだ。

入学式が始まるのが８時半、余裕を持って目覚ましを７時１０分に設定しておいたから何の問題もない。

俺はとりあえず上体を起こし雑音の原点であるスイッチを押した。

「あーー・・・」

わずかだがカーテンの間から太陽の光がさしこんでいるのがわかる。

晴天だ。素晴らしい学校日和じゃないか・・・！

思いきって　カーテンを全開にすると案の定、まぶしい光が一直線に俺の目に飛び込んできた。

フフフ、どうやら俺は太陽にも祝福されているようだ。

さ～て、それでは早速学校へ行く準備を・・・。

「・・・・・ん？」

はて？おかしいな、目覚まし時計が８時１０分をさしているように見えるのだが・・・・・。

念のため携帯の時間も確認してみる。

８時１０分。

・・・・・・・・わお、遅刻だ。

「うがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

慌てて布団から離脱し、壁にかけてあった制服に手を出すと急いで着替えを開始した。

迂闊だった・・・まさか一時間遅れで設定していたとは・・・。

入学初日に遅刻など冗談ではない！

十秒単位で着替えを終わらせた俺はカバンを手に取り、部

屋を出るとそのままドアに直行し、家を出た。
とある理由で俺には両親がいないため行ってきますとは言わない。
俺はあらかじめ家の前にとめていた自転車に飛び乗ると鍵のロックを解除し、猛然と走り始めた。
最悪だ・・・！マジで最悪だぁ！！
初日一人だけ遅刻などしてきたら、先が非常に気まずい。
最悪の場合不良と思われてもおかしくはない・・・。
「くっそぉぉぉぉぉ！！俺だけ遅刻してたまるかぁ！！」
「残念だが・・・一人ではないぞ？」
「は？」
視線を横に移すと、そこには俺同様自転車を猛スピードで走らせている神騎高校の女子生徒がいた。
背中辺りまで伸びた綺麗な黒い髪が特徴的な彼女は一目で美人という印象を受けた。
しかしその時俺はまだ気づいていなかった。
彼女との出会いが俺の人生を大きく変えることになるとは・・・。
俺の目の前に突如として現れた謎の美少女。
俺の自転車の最大スピードに追い付いてくるとは・・・
女子のわりにやるじゃないか・・・！
って何を張り合っているんだ俺は・・・というかこの子も俺と同じ遅刻生徒か。仲間がいてよかったぁ
「何安心したような顔してるんだ？もらしたのか？」
「全然違ぇよ！女子がもらすとか簡単に言うな！！」
びっくりした・・・口を開いたと思ったら何を言い出すんだこいつ。
「じゃあ今の安心したような顔はなんなんだ？」
「え？いや、あれだよ。学校に遅刻しそうなのが俺だけじゃなくてよかったなーって思って」

「ふーん？お前学校初日から遅刻しそうなのか、はははははは、こりゃ傑作だ、とんだクソ冒険野郎だなー、はははははは」

うわぁ何こいつ、かなりムカつくんだが・・・全部棒読みだし

「俺のことそんな風に言うけど、お前だって人のこと言えねぇだろ！」

「は？何言ってるんだお前、私は進んで遅刻しているんだ。少しでも遅れれば成績を下げられる緊張感、それと時間ギリギリで間に合った時の達成感・・・私は日々戦い続けている、修羅の道をな！！だからお前のように素で遅刻するような奴とは専用機と量産機の差なんだよ、分かったかザコ」

「じゃあお前の髪のその寝癖はなんなんだろうな？」

「っ！？」

俺の言葉に慌てて片手で髪をわしづかみにする専用機（勝手に命名）

実際超ハイスピードで自転車をこいでいるため、風圧のせいで髪は乱れ寝癖などわかるはずもないのだが・・・。

「く・・・私としたことがなんという失態だ・・・！こうもあっけなく嘘がばれるとは・・・！」

「やっぱ嘘かよ」

「い、いや！違う！アンコウをサテライトキャノンで熱したら爆発してしまってだな！直そうとしたのだが返事がないただの屍状態で！時間操作で爆発する前の状態に戻ろうともしたのだがことごとく・・・その色々とあってだな・・・」

言い訳が苦しすぎる・・・さも当たり前のように二次元の世界を口にしてたし・・・テンパっていたのはわかるが動揺しすぎだろ。

「つ、月が出てなかったから失敗したんだ・・・月が出ていればあんなアンコウの一匹や二匹軽く焼けたと言うのに」

「おーい、いい加減現実に戻ってこいよお前、今の話全部嘘ってこ

とだろ？」
「最初からそう言ってるだろ！？」
「言ってねぇよ！勝手なこと言うな！」
なんなんだこいつ。すげぇやりにくいというか話しにくい・・・。
会話でこんなに疲れたのは久しぶりだ。
「すまないな、まさか私の他にも遅刻している奴がいるとは思わなかったから、少し嬉しくて・・・それにお前妙にツッコミ上手いしな」
「お前の言うことが色々おかしすぎるんだよ、誰だってツッコミたくなるさ」
「ここで出会ってのも何かの縁かもしれないな、一応名前を教えてくれないか？私は前原夢矢、みんな夢さんやら夢っちと言ってくる、さすがに男子にそんな呼び方されると吐き気がするから夢矢で構わない」
「相場優人だ、俺は別にあだ名とかはなかったな」
「親友どころか友達もいなかったのかお前は」
「何であだ名がないだけでそんな扱いになるんだよ！！」
「ツッコミワロスｗｗｗ　」
くすくすと笑う夢矢。くそ、顔は無駄にかわいいのに・・・！
「優人」
「お、おう！なんだ？」
いきなり下の名前で呼ばれた俺は思わず動揺してしまった。
正直女子に下の名前で呼ばれたのは初めてかもしれない。
「時間がない、フルパワーで行くぞ」
「あ、ああ！」
「奥義！夢矢ブーストォ！！」
俺の視界から夢矢が消えた

（速い！！）

「ち・・・負けてられねぇな！・・・優人ブースト！」

夢矢に負けぬ勢いで俺も全力でペダルをこぎ、彼女の後ろへ続いた

「ツンデレ副会長見参！」

「うらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「ぬぅがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
激しい轟音とともに俺と夢矢は神騎高校へ続く一本道をかけていた。
我ながら気持ち悪い奇声だと思う、仕方ないだろ？
極限状態に陥った人間は内なるパワーを呼び覚ます的なことをよく言うだろう、アニメとかで何かが覚醒する時「はぁぁぁぁ！！」とか言うあれだ。
まぁ俺は髪の色は金色になったりしないけど、叫ぶと何か力が込み上げてくるのはどこの世界でも同じことだ。
声はいいとして俺的には今どういう表情になっているのかが気になる。
顔芸になってなきゃいいが・・・。
「優人！見えたぞ！」
前方を見つめると視界のほとんどを奪うほどの巨大な建造物が待ち構えていた。
その建物の屋上から巨大な旗が掲げられている。天使を模したような紋章が描かれたその旗は間違いなく神騎高校のものだった。
ついにやって来たのだ、神騎高校に！！
「何をボーっとしてるんだハゲ男！急ぐぞ！！」
俺の感動は一瞬にして夢矢に破壊された・・・ていうかさりげなく今ハゲとか言わなかったか！？
しかし夢矢の言う通り、状況的には感動に浸っている暇はなく、一刻も早く学校に到着しなくてはならない。
俺と夢矢は再び極限の奇声をあげながら走り出した。しかし。
「おい夢矢！！」
「ハゲ男って言ってごめん！！」
「いやそのことじゃねぇよ！いや、それもそうなんだけどそうじゃ

なくて！」
「じゃあ何だ！？」
「減速しなくていいのか！？」
「ええ！？遠足！？」
「減速だよ！！このまんまのスピードで行ったら絶対事故るぞ！？」
そうこう言っているうちに俺たちの自転車は神騎高校の校門を一瞬で通り抜けた。さすが国内最大級の高校の校庭、超広い。
端から端まで1キロくらいはあるだろう。
とはいえ安心はできない、適当なタイミングでゆっくり減速を始めなければ確実に壁に激突する。入学初日の思い出を病院で過ごすわけには行かない。
「大丈夫だ優人！このまま行ける！！」
夢矢が予想外の言葉を発した。馬鹿かこいつは！
「何を根拠にそんなこと言えんだよ！！」
「あいつが止めてくれるはずだ・・・！」
あいつ・・・？
とりあえず夢矢の言う通り、減速せずに校庭を突っ走っていると前方に小さな人影が見えた。場所的に俺達の真正面だ。
「お、おい！誰かいるぞ！？危ないんじゃないか！？」
「心配するな、あいつなら大丈夫だ。むしろ危ないのは私達の方だ」
「・・・・・は？」
一瞬夢矢の言っていることが分からなかった。しかし夢矢の何かを覚悟するような表情を見た瞬間それが嘘でないことがわかった。
「優人、一言だけ言っておく・・・死ぬほど痛いぞ」
え？何？何が起こんの？
「沙奈ぁぁ！こぉぉい！！」
夢矢が前方、おそらくあの人影に向かって大声で叫んだ。
俺は訳のわからないまま夢矢の隣をキープしつつ人影に突進していく。
段々と人影の姿がハッキリしてきた。

女の子だ。神騎高校の制服を着ているが俺達より少し小柄な体型をしている。地面すれすれまで伸びている真っ赤な髪が実に印象的だ。
沙奈と呼ばれる少女は夢矢の呼び掛けに少し顔をあげるといきなりその場でかがみこんだ。俺との距離わずか１０メートル弱。ぶつかる！
そう思ったときには彼女の姿はなかった。
（え！？）
消えたと思ったのは彼女が跳んでいたからである。
先ほどかがみこんだのは高くジャンプするためだったのだ。
そして、彼女が跳んだと気付いた時には彼女のスポーツシューズのつま先が俺の顔面にめり込んでいた。
ゴキンッ
超嫌な音がした。隣の夢矢も同じ状況だった。
そう、彼女は跳んだ瞬間空中で開脚し、そのつま先を俺達の顔面にぶつけたのだ。
勢いではこちらが勝っていたはずなのに、俺は一回転しながら宙を舞うとそのまま地面に頭から落ちた。
ガシャーンッ
少し向こうで二台の自転車が転倒する音が聞こえた。
「ぐ・・・いってぇ・・・！」
歯も折れてなければ、鼻血さえも出ていなかった自分の顔面を実に尊敬するよ。
「お、おい夢矢！大丈夫か！？」
「フン、この程度・・・当たったとしてもどうと言うことはない！」
「鼻血でてんぞ？」
「超痛いぞ・・・」
夢矢はポケットからティッシュを取り出すと無造作に鼻に突っ込んだ。
「随分とタフなのねあんた」
声をかけてきたのは夢矢ではなく沙奈とかいう少女だ。

今の事件の完ぺきな容疑者だ。
「お前、いきなり何すんだ！」
「何って・・・こいって言われたから行っただけよ。というかいつものことだし」
いつものことなの！？
「それより・・・あんた一年よね？二年の先輩に向かって何すんだはないんじゃないの？」
「は？二年？・・・・・・誰が？」
「あたしに決まってんでしょ！！そんなこともわかんないのあんた！二年Ｂ－Ｃ三組一九番藤村沙奈！生徒会副会長！学校じゃあたしの名前を知らない生徒はいないわ！それなのにあんたは！」
せ、先輩だったのかこの人・・・俺より背が低いからてっきり・・・。
「え・・・っと、すみませんでした」
「う・・・ん・・・そ、その・・・あ、あんたがいいなら別にため口でも、いいわよ？」
えーなにこの反応？
「ハッハッハ、相変わらず沙奈はツンデレだなぁ」
軽快に笑いながら夢矢が言った。
ああ、ツンデレってこんななのか、初めて見たよ。
「ツ、ツンデレじゃないわよ別に！勘違いしないでよね！？」
「ああー、はい」
「ため口！！」
「あ、ああ」
「ところで沙奈、お前がここにいるってことはまだ私達は遅刻じゃないということだな？」
「それはそうだけど、さすがにもう猶予はないわよ？」
「ち、仕方ない・・・こうなったら自転車で体育館に突貫を・・・！」
「それは無理よ、さっき私があんたら蹴った時自転車の前輪に針で

穴開けといたから」
「「何してくれるんだお前!!」」
「帰りもあんなことされちゃたまんないもの、とにかく今はもう走って体育館に滑り込むしかないわね」
「うをぉぉぉぉぉぉ!!!」
また夢矢が俺の視界から消えた。あいつ走るのも速いな・・・。
「ちょ、ちょっと!・・・ああもう!あの人はいつもいつも!」
呆れたような表情で沙奈は夢矢の後を追うように走り出した。
「お、おい!俺をおいていかないでくれよ!!」
俺も負けじと二人に続いた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・ふぅ」
もはややけくそ感覚で体育館へダッシュした俺だったがどうやらそれが結果的にいい方に転んだらしく、何とか始業式に間に合った。
ちなみにこの神騎高校、国内最大規模の学校のため生徒の数も無論国内最大人数だ。
確か・・・新入生だけでも二千人はいるとかいないとか。とにかくすごいのだ。
しかしそんなものだから始業式などの正式な儀式の時にその人数を体育館に入れることは不可能なため、体育館は合計で十館以上あるらしい。
ちなみに大きさ的には普通の高校の体育館とは比べ物にならない。
俺がついたときには長蛇の列が視界に広がっていた。まるで軍隊だ。
神騎高校は制服の肩の模様で何年生かを区別できるようになっていて一年は天使、二年はグリフォン、三年は白竜、簡単にいえば三年に近づくにつれどんどんパワーアップしていくのだ。
並んでいる生徒の肩を見るとほとんど天使の模様だったため俺は息を落ち着けるととりあえず適当な列の最後尾に並んだ。
特にクラス分けもされてないから適当に並んでも大丈夫だろう。
それにしても一体何列並んでるんだ?余裕で壇上が見えないぞ?

「それではこれより第６３回、神騎高校始業式を行います」
どこからともなく聞こえてきたアナウンスに俺は身を強張らせた。
やっぱ妙に緊張するよなこういうのって・・・。
「それではまず始めに生徒会から新入生にあいさつです、生徒会副会長藤村沙奈さん、お願いします」
アナウンスの言葉が終わると体育館のあちこちから巨大なモニターが姿を現した。映しているのはもちろん壇上だ。なるほどこうやって壇上を見ることができるのか・・・高性能だな。
しばらくするとモニターに小柄な赤髪の少女、藤村沙奈が姿を現した。
「見て、あれが神騎高校噂の美人副会長藤村沙奈様よ」
「ああ、何てかわいらしい・・・抱き締めたいわ私！！」
「いいなぁ・・・告白したら彼女になってくんないかなぁ・・・」
「馬鹿かお前、あんなかわいいのに彼氏いないわけないだろ？やめとけやめとけ」
辺りから様々な生徒のひそひそ話が聞こえてきた。
新入生でさえこれなのか、それなら在校生で存在を知らない奴はいないのというのも十分うなずける。
「生徒会副会長の藤村沙奈です。この度は皆さん、入学おめでとうございます・・・これから皆さんはこの神騎高校の生徒として・・・」
沙奈のあいさつが始まった。さすがは生徒会副会長、先ほどから心に響く単語が何度も聞こえてくる。
これも才能と人望の産物なのか、妙に尊敬したくなってくる。
まぁ俺はもうあの人に敬意を持って接しないけどな、というかもうあまり会えないかもしれない。
こんな数の生徒たちをまとめる生徒会だ。俺みたいな普通の新入生が簡単に会える存在ではないはずだ。
「・・・・・・それでは皆さん、これからの学校生活を悔いなく過ごしてください」

話が終わると一斉に拍手がわき起こった。すごいな・・・。
副会長でこれならやはり気になるのは会長だ。沙奈をも越えるすごい人に違いない！
「続いて生徒会会長・・・前原夢矢さんお願いします」
へぇ、生徒会長は前原夢矢というのか、さっき会ったあいつと同じ名前じゃないか、もしかしてあいつが生徒会長だったりして、ははは、んなわけないか。
俺は心の中で笑いながらモニターを見つめていた。
しばらくするとひどく息を切らした黒髪の女が現れた。
おお、髪まであいつそっくりだ。瓜二つとはこのことだろうな。
「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・せ、生徒会会長の・・・はぁ・・・ま、前原夢矢です・・・すまない、今到着したばっかだったので、息がやばい・・・はぁ・・・はぁ・・・死ぬ、マジで死ぬ」
そこには先ほど俺が出会った前原夢矢がいた・・・・・お願いだから誰か嘘と言ってくれ。
「いやぁ・・・さっきはマジで遅刻すると思ってたから・・・ホントに間に合って良かった・・・はぁ・・・げほっ」
いくら何でも息切れしすぎだろあいつ・・・見苦しすぎるぞ。
しかも今回は生徒が一人もひそひそ話をしていない、みんな絶句しているのだろう、俺だって絶句したよ・・・二つの意味で。
「えぇっと、新入生の皆さん入学・・・ごほっごほっ！・・・おもでとう・・・・・えー本日はお日柄もよく・・・・・・」
夢矢のあいさつが始まったものの、沙奈とは明らかに何かが違った。
まず見苦しすぎる、せめて息を整えてから壇上に立ってほしい。
それとあいつ、スピーチが下手くそすぎる。生徒会長って言ったらもっとスラスラと沙奈のように心に響く言葉を言ってくるのにあいつは何を言ってるのかよく分からないし、丁寧語の間に標準語が入ってきたりするため緊張感が全く感じられないのだ。
でも逆にそれはそれで夢矢らしいのかもしれない。
「・・・・・実はここに来る途中私は一人の男子生徒に会ったん

だ」

・・・・・ん?

「そいつも私と同じで遅刻しそうになっていて一緒に行くことになったのだが、これがまた面白い奴でな」

うわぁ・・・あいつ俺の話始めやがった。何かもう普通に標準語になってるし。

「そいつは的確にツッコミを入れてくれたり、初対面の私に何の躊躇もなくため口を使ってくれたりした」

入学式にこんな話していいのか?完全に個人の話じゃないか。

「そうだよなぁ!相場優人ぉ!!」

「な!?」

うっかり声をあげてしまったせいで、生徒全員の視線が一瞬で俺に向けられた。

「相場優人ってあの人のこと?」

「 先輩にため口って、しかも生徒会長にだよ?」

「初日から遅刻しそうになるなんて・・・もしかして不良?」

あぁぁぁぁぁぁ、俺の信用が一気に消えていく。何してくれるんだあの変人女。

「私は悟った、この出会いは運命だと・・・!・・・だからこの場を借りて言わしてもらう・・・相場優人を生徒会に強制入会させる!!!残念だが決定事項だ!ファンタジーゲームでいう逃げられないだ!観念するんだぞ優人!会長権限だ!!」

「・・・・・・・・・」

何も言えなかった。あまりにも急すぎたもんだから。

生徒会?生徒会?生徒会だと?

マジで何してくれるんだあのイカレ女

「勧誘戦争勃発！！」

「え、ええ・・・ではこれで第６３回神騎高校始業式を終わります」
司会進行と思われる教頭先生らしき人が少し落ち着きなく言った。
無理もないさ、生徒会長がいきなりあんな変なこといい始めたんだから動揺するなという方が無理な話だ。
ちなみに夢矢はスピーチ（俺に対するメッセージ）の途中で藤村沙奈に強制連行された、当然の結果だ。
次々と生徒達が退場していく中で俺は一人立ち尽くしていた。
このまま他の生徒達と一緒に外に出たら何か気まずい、せめて最後に一人でひっそりと・・・。
「おーい優人ー！」
来んな来んな来んな来んな！マジで来んなぁ！！
しかしもちろん心の声など届くこともなく、俺の前方から満足そうな表情の夢矢が走ってきた。
こいつに会うんならみんなと一緒に逃げときゃよかった。
そんな俺の気持ちなどお構いもなしに夢矢は俺の目の前で急ブレーキすると上目遣いで俺を見つめてきた。
「・・・なんだよ」
「いや、なんだよじゃなくてそこは萌えろよ、私の上目遣いだぞ？　そんなに俺を堕としたいのか（人生の階段から）
レア物なんだぞ！」
「知るか」
「お前はオタクにはなれない・・・・・・」
何で残念そうな顔すんのこいつ・・・・？
「そんなことよりお前・・・！なにしてくれたんだ」
「何してくれるんだろうな私」
自覚しているのか、それともふざけているのか・・・一体どっちなのだろうか・・・・・顔が少しにやけてる、少なくとも後悔はし

ていないらしい。結局自覚もできてないのでは？
「お前・・・自分の言ったことわかってんのか？」
「わ、私だって・・・私だってあんなこと言いたくなかったの・・・
でも、でも、ああでも言わないとあなたと私は一生城と外の関係に
！」
「何の話だ！ていうかなんだそのキャラは！！」
「ふぅ、良かった。ツッコミは見事に健在のようだ」
こいつ試しやがったな、何でこんな俺に執着するんだ？
「お前さ」
「お前じゃない、神だ」
「じゃあ神、お前さ」
「ごめん！やっぱ神やだ、夢矢で頼む」
「じゃあ夢矢、お前さ、さっきのこと本気で言ったのか？」
「本気じゃなきゃあんな恥ずかしいことできるか、本当は生徒達に
変な目で見られたくなかったし、沙奈に「バカ！夢矢のクソバカ！」
とも言われたくなかったさ！・・・・・・だがそれを押しきって
でもお前との出会いをあれで終わりにはしたくなかったんだ！これ
は多分本当だと思うぞ！」
「自分の意見くらい１００％にしろよ！なんだよ多分って！」
「うるさいなぁさっきから・・・何が不満なんだ！」
「お前の頭だ」
「確かに昨日シャンプーと間違えてボディソープで頭を洗ってしま
ったが別にそんな影響ないだろ！？臭いのか？臭うのか？なんなら
今からすぐに寮に戻って洗い直してくるか！？」
「ああぜひともそうしてもらいたいね、それでもって二度と俺の前
に現れるな馬鹿野郎」
我ながらひどいことを言っているとは思うが、俺は自分の意思を貫
き通させてもらう。
「・・・そんなに私のことが嫌いか・・・・・・そう・・・か・・・
そうだよな、いきなりあんなこと言われたらびっくりするし、ふざ

けんなって思うよね・・・・・・う・・・」
あれ?え?嘘!?泣いてる!?え!やべぇ!!
「ね、ねぇ会長さんなんか泣いてない・・・?」
「まさかあの相馬って奴が何かしたのかも・・・!」
「うわぁ・・・・・女の子泣かすとか最低・・・!!やっぱり不良なのよあいつ!」
とっくに体育館から去っていたと思っていた生徒の数人がなぜか出口付近でこちらの様子を伺っていた。あの目は完全に何かを誤解している、多分俺が夢矢を何らかの方法で脅し泣かせていると思っているのだろう。
いかん、誤解を解かねば・・・・・・だがその前にまず夢矢を泣き止ませなければ・・・。
「な、なぁ夢矢泣くなって、な?その・・・俺が悪かったからさ!」
「う・・・うぅ・・・・・ごめんなさい、ごめんなさい・・・!」
やめろぉぉ!!なに謝ってんの!?完全に俺が何か脅迫したみたいじゃないか!
「やだ・・・私達の学年にあんな怖い人がいたなんて・・・・!」
「登校初日で生徒会長を泣きながら屈服させるほどの危険度!!」
さすがにこれ以上誤解されると困るので俺はひそひそ話の集団と話をつけようと彼らのいる方向に振り向いた。
しかしそれがいけなかったのだろう。
「ヤバい!こっち見た!!」
「うわわわ!俺達も目つけられちまうぞ!!」
「は、早く!早く逃げよう!!」
言うだけ言って、ひそひそ話の集団は一目散に逃げ出してしまった。
多分あいつらは俺の話題を学校中に言いふらすだろう。
ああ、俺の薔薇色の高校生活が一瞬にしてはかなく・・・・・・。
「なにやってんのよあんたら、もうとっくに始業式は終わってるわよ」
「・・・・・・・」

藤村沙奈もきっとこの光景を見ればすぐに誤解を始めるだろう、まぁ無理もないんだが。
「・・・・・あんたが泣かしたの？」
「え！？い、いや！俺は別にそんなつもりじゃ・・・！」
「うぐ・・・優人ぉ・・・・・・お願いだ、お願いだから生徒会に入ってくれないか・・・？」
「・・・いや、その何だ？決して生徒会に入りたくないわけじゃないんだよ、でも国内最大規模の学校の生徒会だろ？そんなたいそうな所で俺仕事をこなしてく自信がそんな無いんだよ、俺別に頭もよくないし、どちらかと言うと不器用だし・・・生徒会なんて俺には」
「失敗することは誇れることだ！・・・お前はやりもしないであきらめるのか？そんな道理、お前の無理でこじ開けろ！！」
「・・・・・わかった、わかったよ、俺も男だ！こんな下らないことで悩む器じゃない！」
「その割には随分しぶとく抵抗してたみたいだけど何なのかしらね」
「・・・・・うぐ・・・それもそうだな、じゃあ夢矢の涙に折れたのかも・・・」
「この女ったらしが」
「沙奈、もうやめろ・・・じゃあ優人、お前は生徒会に入ってくれるんだな？」
「ま、別にこれといってやりたいことがあったわけじゃないし・・・それによくよく考えると生徒会の仕事に貢献しとけば善良生徒のレッテルを貼られて不良疑惑も改正されるしな」
「その不良疑惑は誰が原因なのかしらね？」
「沙奈、黙ってないとぶっとばすぞ」
「はいはい」
ゴーン、ゴーン
学校中にベルの音が鳴り響いた。どうやら少し時間を食い過ぎてしまったようだ。
「おっと、もう時間か・・・じゃあ優人、クラスのあいさつが終わ

ったらすぐに生徒会室に来てくれ、絶対だぞ?」
「分かってるって、それじゃあまた後でな!」
そしてベルが鳴り終わる前に俺達は別れた。

「会長・・・夢矢会長・・・」
「ふんふんふふーん♪ふんふふーん♪」
生徒会室へと向かう道中、軽快なステップと鼻歌で上機嫌丸出しの夢矢に沙奈が声をかけるも全く相手にされていない。
「かいちょ・・・・・・夢矢!!!」
「ん?うをぉ!?ど、どうした沙奈」
ようやく呼び掛けに応えた夢矢に呆れながら沙奈は一つの疑問を投げ掛けた。
「率直で言わしてもらうと、何であの男を選んだんですか?会長があそこまでして入れたがるなんて・・・尋常じゃないですよ」
「・・・ああ、そのことか、優人を選んだのにはちゃんとした理由くらいあるんだぞ?」
「その理由を私は知りたいんですよ」
「・・・・・・・・・それ聞いちゃう?」
「聞いちゃう」
「う、うん・・・・・・そうか、聞きたいのか・・・むぅ」
夢矢は少しオロオロしながら周囲を見回すと突然沙奈の手を引きひとけのない階段に移動した。
「周りの連中に聞かれたくないほど深い理由ってこと?随分と珍しいですね、会長らしくもない」
「・・・・・・らしくないことは分かってる、だがこればかりは仕方がないんだ・・・それでだな・・・その・・・」
「別に誰にも言わないからさっさと教えなさいよ」
「・・・・・・実は新学期が始まるより少し前の話なんだが、夜に一人で買い物して帰ろうした時「ひゅー♪君かわいいねぇー♪今か

ら俺らと遊んでかない？」的なことを言ってきそうな男二人が私の前に現れたんだ」

「それ普通にチンピラとかでよくない？」

「それで夜も遅くて辺りも暗くなってきたから面倒事になる前に行こうとしたんだ。そしたら見事に絡まれてな」

「それで？」

「どうにも帰らせてくれないようでな、少し涙目になりかけたその時にあいつ、相馬優人が来たんだよ」

「・・・・・それで？」

「その子を離せよって言ってきたんだがもちろんチンピラ二人は反抗してな、けど優人はその二人をあっという間に撃退して私を助けてくれたんだ・・・顔は一瞬電灯に照らされた時に見えただけでな、結局真っ暗なまま「気をつけろよ」とだけ言い残してどっかに行っちゃったんだがその時一瞬見えた顔と声がとても凛々しくて優しくてな・・」

「・・・・・・・・で？」

「・・・・・一目惚れした」

「・・・なるほどね、だからあんなしつこく迫ったってわけね？」

「かっこいいと思わないか？思うだろ？」

「ぜんっぜんそうは思わないわね、ま、人の好き嫌いはそれぞれだからどうこう言うつもりはないけどね、じゃ、先に行ってるわよ」

沙奈は特に大きな反応を示すことなく、紅の髪を揺らしながら先に行ってしまった。

おいていかれた夢矢も少し顔を赤くし、うつむきながら後に続いた。

体育館から出た俺は少し歩みを早めていた。

次のチャイムが鳴るまでにクラス表を受け取り、そのクラスまで行かなくてはならない。

夢矢と話していたせいで大分時間を喰ってしまったため急がなければならなくなったのだ。

果てしなく続く廊下を歩いていると前方に人混みが見えた。
しかも妙に騒がしい。廊下の両脇に陣を組むようにして並んでいる生徒とその間を歩いている生徒に分かれている。
雰囲気的に巻き込まれたくはないが、クラス表を手に入れるにはあの人混みを抜けなければならないのだ。
とりあえず覚悟を決めそのまま直進していくと段々と人混みの正体が見えてきた。
「サッカー部！ぜひともサッカー部に入部を！！」
「バスケ部も楽しいよ！」
「高校青春を味わいたいならやっぱり野球部！！」
人混みの正体、それは上級生達による部活勧誘だ。
部活の宣伝のための看板や紙などを持った上級生達が始業式を終わらせた新入生めがけて強引に勧誘していっている。
その対象は無論俺も例外ではない。
「そこの君！剣道部に興味はないかな！？」
俺の道を阻むようにして現れたのは、袴姿で竹刀を片手にしている女子部員だ。緑色の髪は背中辺りでひとまとめにされてる。
背中辺りから見える髪を留めるための大きな黄色のリボンが実にかわいらしく見える。
「剣道いいよ剣道！剣道って言うのはね人の眠ってる潜在能力を引き出すことができる素晴らしいにっぽんの文化なんだよ？集中力もつくし耐久力だってつくし、極めれば心頭滅却もできるようになるんだよ！」
「心頭滅却・・・？」
「そう！しんとーめっきゃく！ほらよく言うでしょ？「心頭滅却すれば火もまた涼し」って！すごくない！？火も涼しいって言えるんだよ！マグマに入ってもまだちょっとあちぃ程度なんだよ！」
いや、マグマはいくらなんでも即死だろ・・・。まぁ言いたいことは分からなくもないんだが・・・。
「マグマなんか入ったら死ぬに決まってんだろ、馬鹿かお前」

今の言葉を発したのは俺ではない、緑髪の彼女と同じ、袴姿の男性だ。
茶色の荒れた短髪が妙に服装とマッチしている。
「え～！？なに言ってんのさ～！確かにマグマは言いすぎたけど心頭滅却すれば火くらいはどうってことなくなるよ！しーくんだって心頭滅却してると私の声聞こえないでしょ？前いくら声かけても反応なしだったしさ！」
「あれは単純にうざかったから無視してただけだ」
「えー！？じゃああれ心頭滅却じゃなかったのー！？」
「うるせぇな・・・そんなに言うならお前心頭滅却やってみろよ」
「む！そこまで言うならいいよ！この新入生の子にも剣道の素晴らしさを分かってもらういい機会だしね！」
うーん・・・？よく分からんがこの人が心頭滅却とやらを見せてくれるらしい。なるべく時間を喰いたくないのだがもう雰囲気的にここにいなきゃいけない空気になってしまっている。心頭滅却なんてやられても剣道部に入るつもりなど全くないのだが・・・。
「じゃあ今から始めるから、しーくんさ、少したったら私に好きなことしていいよ！明鏡止水になれば痛みも何もかも感じなくなるからしーくんに何されても私この座禅は解かないよ！」
「分かった」
緑髪の部員はその場で座禅の体制になるとそっと目を閉じた。
「それでは・・・朝井緑！参る！！」
女子部員＝朝井緑はその瞬間、動かなくなった。
おお・・・ザ・ワールドみたいだ・・・！
体はもちろん指先の先端に至るまで一ミリも動いていない。
「・・・明鏡止水とやらにはもう入ったらしいな。んじゃやるか、えーと？お前名前は？」
突然茶髪の男性の方の先輩（しーくん？）が俺に指差した。
「あ、相馬優人です」
「相馬か・・・よし、じゃあ相馬よく見とけ、心頭滅却なんてもん

は高校生の俺達にとってはまだまだ幻想だってことをな」
「・・・は、はぁ・・・？」
「後藤四郎、参る」
しーくん＝後藤四郎先輩は壁にかけてあった竹刀を鞘から出すと緑先輩の目の前で面の態勢に入った。
これが面の態勢か・・・！なんかこっち心頭滅却してるようにも見えるのだが・・・。
「・・・・・・・・・面！と見せかけての横打！！」

パァンッ！！

「ぶっ！！」
一瞬面を出したと思われた四郎先輩だが突然竹刀を横に構え緑先輩の頬を問答無用のパワーで叩いた。
緑先輩は見事に意表をつかれたのか、一気にバランスを崩し座禅を崩してしまった。
なんというか・・・結構ひどい人だな。
「緑明鏡止水破れたり」
「んぶ・・・！さすがはしーくんだね・・・見事に不意をついてくるなんてさすがだよ・・・でももう一回！もう一回だけやらせて！このままだと相馬優人君、ゆーくんに示しがつかないよ！」
ゆーくんって・・・いきなりニックネームをつけるとは、すごい親しみやすそうだなこの人は。
「分かった、じゃあ今度から不意打ちはなしだ」
「よーし！リベンジリベンジ！！朝井緑参る！！」
先程と同じように座禅を組み、集中を始める緑先輩。
いい加減もう行きたいんだが・・・。
数十秒が経ち緑先輩は心頭滅却を完了させたようだ（？）
「さて、と・・・次はどうすっかな・・・・・・そういえばこいつ、心頭滅却すれば火もまた涼しとか言ってたよな？」

「言ってましたけど・・・え、まさか・・・」
「んーどこやったっけなあれ・・・お、あったあった」
四郎先輩が袴のポケットから取り出したのは煙草だ。
「せ、先輩！それって・・・」
「煙草だよ、あ、別に俺が吸うわけじゃないぞ？とある人に買い出し頼まれて買ってきただけだから気にすんな」
「で、でもそれどうするんですか？」
「まぁ見てろって・・・・・・おい三輪、ライター貸してくれ」
「はい、どうぞ」
三輪と呼ばれた剣道部員（男）からライターを受け取った四郎先輩は箱から一本の煙草を取り出すとすぐさまライターで火をつけた。
「心頭滅却すれば火もまた涼し、煙草の火も立派な「火」だよな？」
無表情のまま煙が上がっている煙草を緑先輩の額に近づけていく四郎先輩、そして・・・。

ジュウッ

これがあの煙草の火を人間の皮膚に当てている音だと思うと実に耳を塞ぎたくなってくる。
「あっつ！！あっつ！！あっつ！！あっつぅうぅ！熱い熱い熱い熱い熱いぃ！とととととと溶けるぅ！ひふゅ（皮膚）が溶けるぅぅ！！」
緑先輩はあまりの熱さに一瞬で座禅を崩し、額を両手で押さえながらゴロゴロと廊下をのたうちまわった。
ちなみに四郎先輩はまだ無表情・・・・・鬼畜だ。
「このように、心頭滅却などしても熱いもんは熱いということだ、そうだろ？緑」
まるで額を雑巾で拭くかのように両手でさすっている緑先輩、ちなみに超涙目だ。
「全くもってその通りでございます」

ついに折れた。
「しんとーめっきゃくしても熱いものは熱いし痛いものは痛いし、座禅の態勢とか超きついし周りがすごい気になるし」
何だこの人急に心頭滅却馬鹿にし始めたぞ。
「で、でもでも！心頭滅却なんてできなくても剣道部に入れば自分の奥底で眠っている秘めたる力がぁ！！」
「いい加減にしろ」

パァンッ

再び四郎先輩の竹刀による横打が緑先輩の頬を襲った。
「に、二度も叩いた・・・！しーくんにしか叩かれたことないのに！」
「じゃあ別にいいじゃねーか」

パァンッパァンッ

「痛い痛い！しーくん痛い！！」
喜劇か悲劇か分からない状況に俺はただ立ち尽くすしかなかった。
「相馬、入る気がないんならさっさと行け、随分時間を喰わせたみたいだからな」
「ああ、はい。じゃあ俺はこれで」
「ちょっ！ちょっと待ってゆーくん！私は君と何かの運命を感じた気がするんだよ！だから是非剣道部にー！」
「お前は黙ってろ！」
これ以上緑先輩付き合うのはさすがにごめんだったため俺は逃げるようにその場を立ち去った。
しかし、まだまだ部活勧誘の嵐からは抜け出せそうになかった。

「幼馴染みとの再開」

無限にも思える数の勧誘者達が少しでも部員を集めようと廊下を占拠するこの事件、実は今日に始まったことではない。
誰がいつ始めたか分からないほど昔からあるもので毎年その勧誘者の数と活気、騒がしさは増す一方で最近では「勧誘戦争」という名前までつき神騎高校の恒例行事の一つとなっている。
しかし恒例行事と言っても名前から分かるように内面は以外と過激で一人の部員をめぐって喧嘩したり生徒一人を集団で追いかけまわすなど
周りから見れば最悪な行事とも思えるが、これは今更誰が何と言おうともう止められない規模になってしまっているため。誰も口出しできないのである。
そんな勧誘者達の中にはただチラシを配るだけでなく、しつこく迫ってきたり目の前で色々な技を実践したりとにかく部員を集めたいがためにあらゆる手を施して勧誘していくのである。
そんな中他の勧誘者とは一段と違った方法で部員を集めようとしてる部があった。

とある女子生徒二人が廊下の角から顔だけを出し様子を伺っていた。
一人は金髪ポニーテールに青い瞳と、見るからに外人のパーツが揃うに揃ってはいるが顔立ちは完全に日本人そのものである。
もう一人の方は長い青髪の両側面を小さなリボンで結んでいる。
分かりやすく言うとツインテールとロングヘアーの合わさった髪型である。
二人は廊下の先をまじまじと見つめると一度顔を引っ込めた。
「いいですか？これから作戦をおさらいします」
先に口を開いたのは金髪の少女だ。
「我々は正攻法で新入生に勧誘しても意味はありません、私達にし

かできない方法で部員を手にいれるのです！」
「はい！レイルさん！」
「まず始めに、ターゲットは男子生徒だけです。この作戦は相手が女子では意味がありません、もっとも百合の女子だったら話は別ですが。とにかく、廊下から歩いてくる男子生徒がこの角に差し掛かった瞬間、あなたがここから飛び出して見事に衝突！恐らく男子生徒は怒ってくるでしょうが、そこはあなたの演技力を駆使してその男子生徒を虜にするしかありません。がんばって下さい」
「ま、任せて下さいレイルさん！この「あまかみてんか」が必ずや成功してみせます！だからレイルさんはその・・・・・・少し小さめの大船に乗ったつもりで待っててください・・・」
青髪の少女＝あまかみてんかは金髪の少女＝レイルから視線をそらしながら言った。
「・・・・・自信無いんですね？」
「だ、だってもしもぶつかった相手が超不良とかだったら絶対ぶつかっただけでブッ飛ばされますよぉ！「ってめ、女ぁ！！（激怒）」とか言って胸ぐら掴んで私の頬をバコーンドカーンって感じで！」
てんかは体全体を使って必死のジェスチャーを披露しながら言うも、それを聞くレイルの表情は一寸も変わっていない。
「そんなに心配ならぶつかる瞬間、こちらから先にドカーンバコーンってすればいいじゃないですか。一応あなたは合気道を習ってたんですから先手を打てば楽勝でしょう」
「いやいや！そんなことしたら絶対殺されますよ！」
「・・・・・殴られるのが怖いならあらかじめ下着か全裸で飛び出すというのはどうですか？別の意味でドカーンバコーンになってしまうと思いますけど・・・」
「あーあー！！聞こえません聞こえません！私何にも聞こえません！人の声も足音も口笛も小鳥のさえずりも風の音も最近聞こえ始めた耳鳴りもーー！！」
てんかは顔を真っ赤にしながらその場でかがみこんだ。

そんなてんかの様子を見てレイルは微笑すると「冗談ですよ」と言いながらてんかの頭を撫でた。
「ではそろそろ作戦開始と行きましょうか」

それとほぼ同じ頃・・・

相馬優人こと俺は・・・・・現在絶賛逃走中。
追っている人達はもちろん、勧誘者の先輩達だ。
「どうか釣り部へ！」
「いやいや！自然と感動を楽しめる山岳部へ！」
「男は度胸！体で語る柔道部へ！！」
俺の後ろから大蛇が迫っている・・・！そう考えてもおかしくない程の数の勧誘者達が俺一人のために集団で迫ってきているのである。
「すみませんけど俺！どの部にも入るつもりは全くないんであきらめた方がいいですよ絶対！！」
「「「そう言わずに！！」」」
先程から何度も何度も断っているのに「そう言わずに！！」の一点張りでいくらでも迫ってくる。強行手段にも程があるだろ・・・。
そんな時、俺の視界の先に十字路があるのが見えた。
（・・・・・そうだ！）
突然この状況を打破するための作戦が頭に浮かんだ。成功の確率は低いが一か八かでやるしかない。
俺は十字路に差し掛かった瞬間、右の道に視線を動かすとその先を勧誘者達に見えるように指差した。失敗すれば捕まるが成功すれば！
「ああー！！向こうに楽しい部活がないかとことん迷ってる一年生があんなにたくさん！！みなさんチャンスですよ！俺一人追うより集団を勧誘した方がいいですよきっと！！」
もちろん嘘だ。人混みはいるにはいるがそれらが部活を探している一年とは限らなければ一年生とも限らない。
「集団で部活を探しているだと！？こうしてはいられない！！」

「すぐにそちらに向かわなければ！！」
「全員右折だぁ！！」
ただの馬鹿の集団なのか部員を集めたいが一心で思考がおかしくなったのか、誰一人疑うこともなく勧誘者達の大蛇は見事に十字路を右折してくれた。
しかし彼らのことだ。異変に気づけばすぐにでも引き返してくるかもしれない。
その可能性を恐れた俺は勧誘者達とは逆方向、つまり十字路を左折し全力で走った。
「廊下は走っては行けません」が有効なのは小学生まで、今俺は高校生だ。そんな掟はとうの昔に破っている。
とにかく今は少しでも早くこの戦場から脱出し、自分のクラスに向かわなければならない。
そんな時、また俺の前に十字路が現れた。そこにも依然として勧誘者で溢れているがここを抜ければクラス表受け渡しの場所へ着くことができるのだ。
あと少し・・・！あと少しだ・・・！
そんな希望が知らず知らずのうちに俺の足を速めていた。
しかしそれがいけなかったのだろう。
突然十字路の角から一人の生徒が飛び出して来た。
もちろん俺は止まることもできず・・・

ドンッ！

「あぅっ！」
「うあっ！」
俺は見事にその生徒とぶつかり・・・正確に言うと渾身の体当たりを決めてしまった。
何たって俺は今運動会で１００メートルを走るときとほぼ同じスピードで走っていたのだ。自分で言うのもなんだがその勢いは半端で

はない。
ぶつかった相手は一瞬宙を舞うとズザザザァっと背中で摩擦による急ブレーキをかけながら停止した。
「・・・・・・・・・っ！」
実に情けないことに相手は女の子だ。不慮の事故とはいえ女の子を全力で吹っ飛ばしてしまった。
「う・・・・痛ったぁ・・・せ、背骨・・・背骨がいったぁ」
想像以上に相手は重症だ。周囲から変な誤解をされる前に何とかしなければ・・・！
「お、おい！大丈夫か！？」
急いで寄り添ってきた俺に相手の女子生徒はぴくっと反応した。
しかし顔を上げてくることは無かった。
「な、なぁ大丈夫か？」
「大丈夫です、怪我はありませんから・・・でも、女の子にいきなり体当たりを決め込んでくるなんて随分恐ろしいことを・・・し、してくるんですね・・・も、ももも、もしかして、不良だったりします？」
うわーやばいよ、この子めっちゃびびってるよ・・・。
完全に声と体ブルブル震えてるし、さっきから一度も顔こっちに向けてくれないし・・・。だが一人でも多く俺が不良でないということを知ってもらわなければ！
「俺は不良じゃない！女には絶対手を出さない！これは本当だ、だからさっきのは不慮の事故なんだ。信じてくれ・・・俺は信じる価値のある男だ！」
知らない相手に何を言ってるんだ俺は・・・。
「・・・「俺は信じる価値のある男だ」・・・？」
何故かその女子生徒は今の言葉を確認するかのように俺の言葉を言った
んん？俺を不良でないと信じてくれたということだろうか・・・。
「！！」

今までうつむきっぱなしだった女子生徒が突然バッと顔を上げた。
「うわっ！」
驚いた俺はそのまま腰をぬかしてしまった。
しかし女子生徒はそんなことは気にせず顔を近づけ俺の顔を凝視してきた。近い近い！！
「・・・・・・優人？」
「・・・は？」
いきなり女子生徒が初対面であるはずの俺の名前を口にした。
さっきは驚きと動揺のせいでよく顔を見なかったが、今は落ち着いて彼女の顔を見ることができる。
その彼女の顔は・・・・・・俺の幼馴染みの顔そのものだった。
「て・・・てん？・・・・・・お前、「あまかみてんか」か！？」
「わぁぁぁぁ！！いやぁぁぁぁ！！優人！！やっぱり優人！！嘘！ありえない！！優人なはずがない！！何で生きてんの！！？」
言葉と同時の刹那のうちに俺の幼馴染みは後ろに下がった。
俺は怪物か何かか
「勝手に殺すな！というか、それが小学生以来会ってなかった幼馴染みに言う言葉か！！」
「優人は死んだ優人は死んだ優人は死んだ優人は死んだ・・・！」
「変な疑心暗鬼始めてんじゃねぇよ！」
「な、何で優人がここにいんの！？もしかして・・・・・」
「何でって・・・俺がこの高校に入学した以外理由なんてないだろ」
「・・・・・ああ、うん・・・そうだね」
彼女の名は「あまかみてんか」通称「てん」。幼稚園から小学六年生までずっと一緒だった俺の幼馴染みだ。
知り合ったきっかけは単純に言うとてんを俺がいじめから守ったことにある、ちなみにこいつがいじめられる理由はただ一つ、名前だ。
「あまかみてんか」を漢字に変換すると見事に「天上天下」になってしまうのだ。何故親がこんな名前をつけたかは定かでないがこの名前が原因でてんは幼稚園、小学校でよくいじめられたのだ。

昔からいじめを極端に嫌ってきた俺はてんを毎日いじめから守り続けていた、いじめと言っても所詮イタズラ程度ではあったが。
そんなある日、てんが俺に「優人は私をいじめないの？」と聞いてくるときが何度もあった。
その時俺が決まって言っていた台詞が「俺は信じる価値のある男だ」というわけだ。
てんが突然顔を上げた理由はきっとこの言葉を覚えていたからだろう。
「えぇと・・・その、何て言うのかな・・・久しぶり」
「ああ、中学では一度も会わなかったから三年ぶりだな、久しぶり、中学校ではいじめられなかったか？
「多少はいじめられたけど、もう慣れっこだったからね！大した反応しなかったら知らないうちに誰も私のことといじめなくなってたよ！」
ニッコリと笑う天のこの顔は三年たっても変わっていない。
「ええっと、とりあえず立とっか」
「あ、ああ・・・・・・っ！」
立つまでは良かったが不意に天のスカートから出る綺麗な足を見て一瞬ドキッとしてしまった。
無駄のない綺麗なラインに真っ白な純白の肌。三年もたったのだから天も大人の階段を登り始めていてもおかしくはない。
「んん？・・・・・・はは－ん、さては優人、久しぶりに会った幼馴染みの女としての成長っぷりに心奪われたってところかな！？」
「んな！？そんなことねぇぞ！」
「でも、三年前の私と比べて・・・・・・どう？」
俺は一度言葉を失った。普通に聞かれるとどうも恥ずかしくなってきてしまうのだ、しかし正直な所、驚く程見違えていた。
こんなかわいい女子が俺の幼馴染みとは思えないくらいに。
「・・・・・・かわいくなってるよ、お前」
「・・・・へへ♪ありがと」

天は少し顔を赤らめながらまたニッコリと笑顔を見せた。
さっきまで夢矢や緑先輩、無限の勧誘者達のせいでドタバタして大変だったが、幼馴染みと会ってようやく落ち着いて・・・・・。
「ゆぅぅぅぅぅぅくぅぅぅぅん!!!」

ドドドドドドドドドドドッ!!

悪魔の雄叫びが俺の後方から轟音とともに聞こえてきた。せっかく天と会って落ち着けると思ったのに・・・。
「ゆーくん!!その子に近づいちゃ駄目だよぉぉ!!」
後ろを振り向くと悪魔＝緑先輩が猛ダッシュで一直線にこちらに向かっているのが分かった。その子とは天のことだろうか？
「演劇部の手先めぇ!くらえ必殺!!私のこの手が緑に光る!邪魔者倒せと轟き叫ぶ!」
あの台詞を叫びながら緑先輩はポケットからわさびを取り出すとそれを右手に満遍なくつけた、なにがしたいんだあの人は・・・。
「瞬殺!緑フィンガァァァァ!!!」
わさびがたっぷり塗られた右手を開きながらこちらに接近してくる。
まさかあれを天の顔にぶつける気か!?
「レ、レイルさーん!!」
「任せて下さい!緑ごときに邪魔はさせません!」
天の呼び掛けで現れたのは金髪の綺麗な女性だ。何故か制服ではなく赤いドレスに所々金色の甲冑が装備されている。
「私のこの手が輝き光る!緑を止めろと轟き叫ぶ!!」
ええ～・・・この人もぉ??
「完璧!レイルフィンガァァァ!!」

金髪の女性＝レイル（多分先輩）は手に黄色のからしを満遍なくつけると緑先輩と対峙するように突っ込んでいった。
「むぅ!?レイル!!邪魔するなぁ!」

「こっちの台詞です！」
「てやぁぁぁぁ！！」
「はぁぁぁぁ！！」

バンッ！！

二人の手のひらが衝突し、どうでもいい戦いが幕を開けた。
しかしどういうわけか周囲の生徒達が集まってきている。
「おい見ろ！神騎高校名物の一つ「部長ファイト」だ！」
「すごい！しかも伝説の剣道部部長対演劇部部長じゃない！！こんなところでこの伝説の戦いを見れるなんて！」
俺がおかしいのか周りがおかしいのか全く分からなくなってきた・・・何だよ部長ファイトって、何だよ伝説の二人って、二人とも手のひらに辛いもんつけて手で押し合ってるだけじゃないか。
「うぐぅ！レイルー！！また天ちゃんを使ってよからぬ計画を画策していたね！？そうは行かないよ！！」
「私達演劇部が部員を手にいれるには正攻法では無理なのです！だから天の萌えるかわいさを使って部員を集めたっていいではないですか！」
「女の子の色気だけで部員を誘うなんて言語道断！！」
「そうは言いますが、緑！あなただって似たようなことを無意識のうちにやってるということに気づかないのですか！」
「・・・・・・え！なにそれ！？」
「ふふふ・・・一体新入部員の何割はあなたのその放漫な胸目当て何でしょうかね？」
「！！そそそそんないかがわしいこと考えてる子なんて一人もいやしないよぉ！！」
「あなたが無意識に色気を使って部員を集めるならば！こっちは堂々と意識して色気を使い部員をて手に入れます！！」
「・・・・・・・・・・だからお前はアホなんだぁ！！！」

何故かバトルがヒートアップ、俺には一生理解できない、というかしたくない。
「がんばれレイルさーん！」
ちなみに天はさっきからこんな調子だ。
こいつも新入生のはずだがもう部活に入っていたのか・・・って、俺も似たようなもんか。
「ぬぁぁぁぁぁぁ！！」
「えぇぇぇぇぇぃ！！」
「おーおー、相変わらずやってんなぁお前ら」
俺にとって完全なカオス空間に現れたのは四朗先輩だ。
何だろう、この正義の味方が現れたときのような感動は。
「しーくん！これは私達の戦いだから邪魔しちゃ駄目だよ！！あ！でも加勢してくれるんならいいよ！同じ剣道部員として！」
「何を言っているんです！四朗君、加勢するなら私にお願いします！これ以上緑の横暴を許すわけにもいかないでしょう！？」
「・・・・・お前ら、必殺技がどんなもんか知ってんのか？」
「「はい？」」
「ドゥモンしかり西方不敗しかり、必殺技には綺麗な終わりかたがある。しかしこの状態では拉致があかない、それに今めっちゃ手にわさびとからし染みてるだろ」
「めっちゃ染みてる！からしのせいだよ！」
「何を言っているんです！完全にわさびのせいです！」
そんな口論は下らんと言わんばかりに四朗先輩は二人の腕をそれぞれ掴んだ。
「「！！」」
「わさびもからしも手のひらにだから我慢できるが・・・それ以外の部分だとどうかね」
ゆっくりと四朗先輩の手によって押し合っていた手のひらにが離れていく。緑と黄色が上手く混ざって何か別の食べ物に見える。
「違う部分・・・・例えば顔とかな」

「「え!?」」
「ほら、かっこよく決めろよ・・・ヒートエンド」
そして四朗先輩は二人の腕を自身の目の前で交差させるとそれぞれの手のひらを二人の顔面に直撃させた。
つまり緑先輩の緑フィンガー（わさび）はレイル先輩の顔面に、そしてレイル先輩のレイルフィンガー（からし）は緑先輩の顔面にもろ見事に決まってしまったのである。
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ目がァァァァ!!!」
「あぁぁうぅ!くぅう!これは・・・正直・・・・・あぅぅうう!」
緑先輩は目をふさぎながら廊下をゴロゴロのたうち回り、レイル先輩も同様に目を押さえながら膝をついた。
また四朗先輩に助けられてしまった。しかし、相変わらずこの人のやることは鬼畜すぎる。
「悪いな相馬、ほんと馬鹿なやつばっかりで・・・」
「バカなやつバッカり・・・ぷぷぅ!しーくんさりげなく上手いこといいますなぁ!・・・って冗談だよ?ね、冗談だよ??ちょ!鼻はダメ!わさび鼻だけはダメ!!ちょっ!やめっ!やめっ!ごめんなさい!ごめんなさっいやあああああ!!」
緑先輩の断末魔の叫びが聞こえた・・・今のが本当の必殺技なのでは?
「ほら相馬、こんな馬鹿ほっといてさっさと行け、あと天上、お前も一年だろ。相馬と一緒にさっさと行け」
「ああそっか、天も一年生だよな、なら急ごうぜ!早くいかないと遅刻になっちまう!」
「えぇ!?で、でもレイルさんが・・・」
天が心配そうに膝をついたままのレイル先輩を見ながら言った。その瞬間レイル先輩はちらりとこちらを見るとおぼつかない感じのピースをした。
「い、行ってください天。私なら大丈夫です・・・それにその人が噂の相馬優人君なら今がチャンスでしょう・・・だから行ってくだ

さい！私の屍を乗り越えて！！」
屍じゃないじゃん。とはいえそろそろ冗談抜きで行かなければ本当にまずいため俺はオロオロしている天の手を強引に掴むと急いで走り出した
「え？ちょ！ゆ、優人ぉ！？」
「早くしねぇと本当に遅刻にしちまう！早く行こうぜ！」
「ちょっ！ちょっ！手、手が・・・！」
天がもごもごとなにかを言っていたが俺はそんなことも気にせず走り出した。

「えーと、クラス表クラス表・・・くっそ、まだか？」
俺と天は何とか走って勧誘戦争の戦場から脱出することに成功し、クラス表を受け取り場所まで進んでいる途中だった。
しかし何とか抜け出せたのは良かったものの、未だにその場所に到達できていないのだ。
国内最大規模の学校の広さを侮っていた。
先程地図をもらい、受け取り場所の位置は把握してるものの、極端に距離がありすぎるのだ。
「この地図見る限りならすごい近くにあるようにみえるんだけどな、地図からの距離の計算は宛にならないな・・・なぁ天？」
「あ・・・あの、ちょっ・・・・ゆ、優人・・・」
「・・・・・どうした？」
「て・・・手をそんなずっと握られると・・・ちょっと恥ずかしいというか・・・その、なんというか・・・」
「・・・・・あ」
その時俺はようやく天の手をずっと握っていることに気付いた。
「わ、悪い！つい癖で・・・！」
バッと慌てて天から手を離す。いかん、急に恥ずかしくなってきた。
「ご、ごめんね！嫌ってわけじゃないんだよ！？嫌ってわけじゃないんだけどさ・・・・あれから三年も経つわけでしょ？その、色

々と心の準備ができてなくてさ・・・なんというか、優人を三年前と同じように見れないっていうか・・・・・その・・・す・・・すごく・・・私の想像以上に・・・・か・・・かっこ・・・かっこよく・・・なって」

段々と天の声のボリュームが下がってきた。三年前と同じだ。時折天は突然声が小さくなって何を言ってるのか分からないときがある。その時、体は必要以上にモジモジしているし何故か顔は赤くなるのだ。

「か？かっこがなんだって？」

「わわ！？な、何でもない！何でもない！何でもないから！」

俺が顔を近づけると逃げるようにして離れる。三年前と全く同じだ。

「・・・何か安心したな」

「・・・・へ？」

「天が全然変わってなくて俺、何か安心したよ」

「・・・・それを言うなら優人だって全然変わってないよ？無意識に女の子の手勝手につかんで走り出して・・・昔とおんなじ。私がいじめられてるとどこからともなく現れてさ、いきなり私の手をつかんで逃げ出すんだよね・・・でも結局毎回追い付かれて知らないうちに殴りあいになって・・・勝つときもあれば負けるときもあって・・・正直私ね、勝敗なんてどうでも良かったんだよね。ただ優人が私のために体張ってくれたことが一番嬉しかったんだよ？この人は私を守ってくれる優しい人って、そう思ったから友達になってあげたんだよ？感謝してよね！」

「・・・ああ、分かってるよ」

何一つ変わってない。昔の友達が三年経っても全然変わっていないとこんなに喜べるものなんだな。

「あ！変わってないって言うけどね！私もう昔みたいに泣き虫ではなくなったよ！？もうそうそう簡単に泣いたりしないからね！」

「・・・あの泣き虫天がか？どうだか・・・」

「なっ！！・・・じゃあ優人さ！ありとあらゆる手を使って私を泣

かしてみてよ！私絶対泣かないから！」
えぇ？なにその無意味なゲーム・・・俺はサディストか。
「そう言えばさっきから言い忘れてたけど・・・」
「・・・・？」
「お前の後ろに蜘蛛いるぞ」
「キャァァァァァァァ！！！！！？」
突然天が耳に響く高い悲鳴を上げて俺に抱きついてきた。
ちなみに超涙。
天は昔から蜘蛛が大の苦手なのだ。どうやらそれは三年経っても克服できなかったらしい。
「蜘蛛・・・！蜘蛛・・・！蜘蛛はいやぁ・・・！！」
本気で怖がっている天を見て、少し大人げなさを感じてしまった。
「悪い悪い、嘘だよ嘘、蜘蛛なんかいないって・・・にしてもお前やっぱり蜘蛛はダメなんだな」
「蜘蛛は・・・！蜘蛛だけは勘弁してぇ・・・！」
「・・・・・いい加減克服したらどうだ？何がそんな嫌なんだよ」
「全部・・・！」
「また随分とアバウトだな・・・」
「だってキモいじゃん！目はいっぱいあってキモいし、足もいっぱいあってキモいし、動き方も何かキモいし、口から糸はくとかも何かキモいし、それに罠にかけないと獲物を仕留められないとかただの卑怯者じゃん！騎士の時代に戦車使うようなもんだよ！」
例えがよく分からないのだが・・・まぁどっちも十分卑怯だけど。
「とにかくあいつらは地獄からの使者なんだよぉ・・・うぅ」
「悪かった悪かった・・・それでだな、一つその・・・言いたいことがあるんだが・・・その、お前・・・・む、胸が・・・」
「へ・・・？・・・・・きゃあ！」
天は悲鳴をあげると突き飛ばす勢いで俺から離れた。
そう、天が抱きついてきた瞬間、天の大きくも小さくもない胸が締め付けるように俺の体に密着していたのだ。

三年前はもはや胸があったかどうかも分からないくらい小さかったのにまさか俺が意識してしまうほど成長していたとは・・・。
いかん、なんだか急に緊張してきたぞ。
「ご、ごごご、ごめん・・・！」
顔を真っ赤にしながら両手で胸を隠す天、別に俺は触ったわけじゃないぞ？
「い、いや・・・大丈夫だ・・・気にすんな」
「うぅ・・・・私はちょっと気にするかも・・・」
気にしてないわけないだろ、俺の心臓の音を聞いてみろ！さっきからバクバクバク止まらないぞ！
「・・・・・・で、でもどう？せ、成長したでしょ・・・？」
「ああ・・・まぁ、確かにな・・・正直びっくりした」
「・・・・・・・・・変態」
「なんでだよ！！」
「そういう優人はどうなの？少しはたくましくなった？」
「ああ、まぁな・・・三年前とは比べ物にならないほど強くなってるってことは確実に断言できるな・・・・そうだなぁ、またお前がいじめられるようなことがあったら全勝してお前を守ってやるよ」
「え？・・・・・ま、また守ってくれんの？昔みたいに？」
「いじめられたら、な」
「・・・・・・・・・いじめッ子見つけなきゃ・・・・」
「ん？何か言ったか？」
「な、なんでもないよ！それより急いだ方がいいんじゃない！？」
「・・・だな、よし！じゃあ、ほい」
そう言って俺は天に片手を差し出した。
「・・・・は？え？え？・・・・手繋げってこと・・・？」
「俺さ、何か天と手を繋いで走った方が速い気がするんだよな、いじめッ子が追いかけてくると考えるから焦って速くなるんだよ。それに俺一人で全力で走ったらお前おいてかれちゃうだろ？」
「うぅ・・・・そ、それはそうだけど・・・・・・わ、わかった、

よろしくお、お願いします・・・・・・ぅ」
天は俺から目をそらしながらそっと手を差し出した。
「決まりだな、それじゃあ行くぞ！」
「わ！？わわ！？・・・・・大胆すぎるよ・・・！」
俺は再び天の手を強引に掴むと全速力で走り出した。
大してスピードは速くはありませんでした。

何とかクラス表を受けとることができた俺と天は一年生の教室が並ぶ廊下まで来ていた。
「・・・・・・一年Ｃ－Ｂ組だ」
「・・・・・・私も一年Ｃ－Ｂ組」
クラス表をまじまじと確認すると偶然にも二人とも同じクラスだった。
「おお、同じクラスだな」
「う、うん！そうだね！・・・・・・やったぁ・・・！」
「どうした？」
「なんでもないよ♪♪」
妙に上機嫌な天に俺は少し疑問を感じながら自分達のクラスを探した
「・・・にしても、一年生だけでこんないっぱいクラスがあると相当やばそうだねー、休み時間とか特に」
そう、この神騎高校、国内最大規模の学校のため年間で入ってくる一年生の量も、他校を圧倒しているのである。
そのためクラスはもはや十桁は当たり前といった感じだ。
「勧誘戦争並の騒がしさが毎日くるのか・・・死ぬな」
「死ぬね」
などと、下らない未来予想図を語りながら自分達のクラスを発見すると少し早足で入っていった。
教室に入り黒板を見ると「自由席」と書いてあったため俺と天は窓際の空いていた二つの席にそれぞれ座った。
しかし窓際とは運がいい。なんと言うか窓際と言うのは俺が思うに高校生活における特等席だと思う。
ちなみに天は俺の後ろの席（一番後ろ）だ。
何とか間に合った、チャイムが鳴るまで残り三十秒もなかっただろう。

そこでふと俺は一つの疑問が浮かんだ。俺の隣の席にまだ誰もいない。
机があまるほど余裕はないのがこの学校の現状のはずだ。ということは休みか、あるいは初日早々見事に遅刻か・・・もしそうだったら勇者だな。
そんな特に気にやむことでもないことを気にしているうちに校内にチャイムの音が鳴り響いた。
「どんな先生かな？」
興味津々と言った感じで天が後ろから声をかけてきた。
「お前的にどんな人がいいんだ？」
「うーん・・・優しい先生とかおとなしい先生とか熱血先生とかでもいいんだけど何か今までにない感じの、独特感あふれる先生がいいな！こんな先生もありなのか！みたいな？」
「俺は普通でいいと思うけどな・・・」
すると教室のドアが開き一人の男性が入ってきた。
ボサボサと全く手入れされていない黒い髪とあごひげ。
手はポケットに突っ込み口には火のついた煙草をくわえている。
年はパッと見三十代でおっさんとも言えなければお兄さんとも言えない微妙な顔立ちだ。
「今日からお前らの担任的なものになる工藤だ・・・あぁ、好きなものは酒と煙草と女、嫌いなものはめんどくさいもん全般だ、つーことでよろしく」
「・・・・・・・・・・・・・」
クラスメイト全員もののみごとに絶句していた。
「・・・天、あの先生は今までにない感じの先生だけどどう思う？」
「・・・・・・・・・・・・さすがにあれは無理」
「だろうな」
誰だって疑う、あんな第一印象が最悪な教師は見たことがない。本当に教師なのか疑わしくなってくるくらいだ。
「なんだよなんだよ全員しけた顔しやがって、まぁいいか。んじゃ

めんどくせーけど出席確認するぞー、俺に一回で聞こえる声で返事しなかったら通知表の評価一つ下げるからな」
厳しすぎだろ・・・。
しかし、そうなると余計に隣の席が気になってきた。やはり休みだろうか・・・。
その時、教室の後ろのドアがゆっくりと開く音がした。
明らかに音をたてないようにゆっくりとゆっくりと、もちろん先生は気づいていない。
俺はチラッと視線を後ろのドアに向けた。他の生徒の机が邪魔でよく見えないが誰かいる。
多分、というか絶対俺の隣の席の奴だ・・・遅刻だったのか。
遅刻してきたその生徒はゆっくりとかがみこみながらこちらに近づいてきた。女子だ、長い白い髪の片方を桜のような髪止めでまとめている。
しかし俺が気にしたのは髪などではない、身長だ。
かがみこんでいるから正確な大きさは分からないが見るからに小さいく最低限高校生には見えない。下手をすると中学生にも・・・。
見るからに子供に見えるその生徒は手作りのような旗を両手に持ちながら少しずつ少しずつ俺の隣の席に接近していった。
ちなみにその旗には「ｄｅ　ｐｕｉｅｔ」と書かれている。意味が分からない。
おそらく「ｂｅ　ｑｕｉｅｔ（静かにしなさい）」と言いたかったんだろうが残念なことにｂとｑが逆になっている。中学のころよく間違えたものだがさすがに高校生にもなって間違えるのは恥ずかしい。
というか仮にあってたとしても命令形とはいい度胸だな
そんなことを考えているうちに小さすぎる女子生徒は俺の隣まで来ていた。
小さすぎる女子生徒は椅子に手をかけると素早く席についた。
しかしその時、持っていた誤字の英語の旗がポロリと床に落ちてし

まった。
「・・・・・あっ！」
小さすぎる女子生徒は何故か慌ててその旗をとろうと身を乗り出そうとした瞬間、足が椅子に引っ掛かり・・・

ガシャーンッ

どんな不幸か机も巻き込み床に転倒し、クラスの視線が一斉にそちらに向けられた。何人か俺を見てるような気がするのは気のせいだよな？
「あ・・・あぐ・・・・・・う、うぅ・・・」
顔面から地面にダイブした小さすぎる女子生徒はうめき声をあげながら顔をあげ、周囲を見回した。
教室に入ってわずか一分ほどでクラスの注目のもとになるとは、なかなかやるな。
「！・・・！・・・！・・・！・・・さ、桜イリュージョンでした！」
小さすぎる女子生徒は両手をバッと開くと開き直った顔で言った。
どうした、大丈夫かこいつ。完全にテンパってるぞ？というか今のどこがイリュージョンなんだ？
「あ、あ、あ、あの！違いますよ！？決してそういうのじゃなくてああいう感じでこうなんです！だから・・・どういうことですか？」
本当にどういうことだろうね？お前の頭。
自分から引き起こしておいてなんで疑問形になるんだよ
「あ、あわわわわ！？桜早くも電波的な女の子のレッテルを貼られてしまったんでしょうか？せめてバカ程度でお願いしますよ！？あ！こういう場合は「てへ♪転んじゃった♪」と言っておけばドジッ子として人気者になれてたかもしれません！」
なんなんだこの一人芝居は・・・。
「・・・・・・・・・」

ちなみにさっきから先生がすごいジト目で彼女を睨んでいる。
「あ！！句読点先生！」
「工藤だ」
「そんなさげすんだ目で見ないでください！桜が中学の時の先生みたいに卒業の時のお別れの手紙に「これからがんばって大人として成長していってください！身長と胸は成長しませんけど（笑）」とか書いたりするんですか！？軽くトラウマです！！」
「そんなんやるくらいなら通知表でお前をトラウマにしてやるよ、というか遅刻したことさっさと謝れバカヤロー」
「あ！バカっていった方がバカなんですよ？知ってました？」
こいつさりげなくうざいな。
「・・・・・お前全教科の評価全部Cな」
「ごめんなさい嘘つきました！ごめんなさい嘘つきましたぁ！！」
「ああったく！うるせぇな！今日は特別に許してやるからさっさと席につけバカヤロー」
「桜の頭脳派プレイの勝利ですね！みなさん拍手！！」
もちろん誰も拍手などしない、わざとか？それとも本気なのか？駄目だこっぱりわからん。
「学校初日でいじめが始まるなんて・・・桜ここで泣きたいです」
安心しろ、全員お前のテンポについていけてないだけだ。俺もそうだけど。
「春鈴桜です！いじめもどんとこいです！桜負けません！！あ！今「いじめには勝てても身長と胸は勝てやしないね」て思った人！心の中で桜に謝っといてくださいね！？桜テレパシーでみなさんの思考もいっぱつですよ！ファイトイッパツじゃありませんよ！？」
・・・いかん、駄目だ・・・全然こいつの頭が理解できない、むしろ理解したら逆にやばい気がする・・・。
こんな奴とクラスが一緒とは実に先が思いやられる・・・。
俺は頭を押さえながら軽くため息をついた。

「ふぁあ・・・・・・ん、んぐぅ・・・・あぅ」
今さっき一人で勝手に騒ぎまくっていた春鈴桜だったが騒ぐだけ騒いだらいきなり隣で大きなあくびをした。
どうやら眠気が襲ってきたらしい、本当に子供だ。
とりあえず首は前に向け、視線だけ横にうつす。
そこには首をコクンコクンとかしげ今にも眠ってしまいそうな桜がいた。
「ふにゃ・・・・・・あむぅ・・・・ふむぅ・・・・・・ＺＺＺ」
寝た。
対して睡魔に抵抗することもなくすんなりと机に突っ伏してしまった。
「・・・・・・・・・・・・」
起こすべきなのか起こさないべきなのか、究極の選択と言うわけではないが何故か少し迷ってしまう。
理由は簡単、起こすのは人間みんなにある良心に従って起こしてあげること、そのまま放置はこの桜が騒ぐのを防ぐこと。
うるさくされるのも十分困るが、寝ていたせいで大事な話を聞き忘れたなんてことになったらそれはそれで彼女がかわいそうだ。
やはりここは己の良心に従い起こして・・・・・・・・。
「ふにゃ・・・・・んむぅ・・・・・な・・・なめこぉ・・・・」
・・・・・・・・・・・・ナメコ・・・・・・？
春鈴桜の訳の分からん寝言は無視して起こそうとしたがやめた。
こいつの寝顔が・・・なんというか良すぎる。
平和ボケしたなんとも情けない顔ではあるがぐっすりと深い眠りにつおている。これを起こすのはどうしても気が引けてしまう。
それによくよく考えれば大事な話を聞き逃したとしてもこいつが起きたあと俺が説明でもすればいい話だ。
いつのまにか首も桜に向けられていた、どこをどう見ても小学生に

しか見えない。世に言う「幼女体型」というやつだろう。
世の中にはこういう小さな子を見て欲情や恋愛感情がわく輩もいるとか言っていた気がする・・・・・なんつったっけな・・・・ろ・・・ロリ・・・・ん?
「ロリコン」
「そうだそれだ!・・・って、え?」
俺が後ろを振り向くと物凄い疑惑の目で俺を見つめてくる天がいた。
ちなみに今ロリコンという単語を言ったのは天だ。
「優人ってさ、そういうちっちゃい子が好きなの?」
ああ・・・・・疑われてんのね俺。
「馬鹿、そんなわけないだろ、こいつがあまりにも高校生とは思えない体してたから不思議に思ってただけだって」
「・・・・・・・・・・・本当?」
「本当だって」
「じ、じゃあさ・・・その子と私、どっちの方がかわいいと思う?」
「そりゃあ普通に考えてお前だけど?」
「本当!?」
「ん?あ、ああ」
春鈴桜がかわいいなんて言ったら完全にロリコンにされてしまうからそう言ったのだが、俺がロリコンでないのが分かったのがよほど嬉しかったようだ。
「そこは桜でしょー!?」
「うぉ!?」
突然隣で寝ていたはずの春鈴桜が急に目覚め、身を乗り出してきた。
「お前寝てたんじゃなかったのか?」
「寝てました、ナメッコ星に行っている夢を見ている最中でしたが桜よりもその人の方がかわいいという聞き捨てならない話が聞こえた気がしたので強制的に目覚めました!」
本当に寝てたのかこいつ・・・?ってかナメッコ星ってどこだよ
「こんな子のどこがいいんですか!?全然かわいくないですよ!そ

んなことより桜を見てください！自慢ですけど桜こう見えて中学生の頃は一部の男子生徒に大人気だったんですよ！「よーじょもえー」とか「ひんぬーもえー」とかよく分からないこと言ってましたけど」

幼女萌えーに貧乳萌えーか、その一部の男子生徒っていうのは正真正銘ロリコンだろうな。

「いわば桜、中学生時代はアイドルと言ってもおかしくはありませんでしたね！みんなかわいいかわいいって桜の美貌を褒めてくれてましたから！」

多分別の意味合いだろうけどな。

「今のうちに桜と接点持った方がいいですよ？いずれ桜はここの学校でもアイドルになるかもしれないんですからね！」

「・・・・・・言わせておけばさっきから好き放題言ってくれてるねこのちびっこ！！」

天が軽くキレた。気持ちは分からなくはない

「ちゃんと私を見てからそういうこと言ってよね！」

「なっ！桜ちびじゃありません！それにかわいさなら桜の方が・・・」

天の顔を見た瞬間春鈴桜の動きが止まった、なんというか唖然としている。

春鈴桜はしばらく天を見つめた後、カバンから小さな鏡を取り出し、自身の顔と天の顔を見比べるように交互に見た。

段々と春鈴桜の顔が曇ってきている気がする。

「ちょっとすみません、髪触らせてください」

「え？べ、別にいいけど・・・」

天の了承を得ると春鈴桜はそっと天の綺麗に澄んだ青い髪を撫でた。

「・・・・・・・・はうっ！」

再び春鈴桜の動きが止まった、今度は唖然というか絶句している。

絶句の表情のまま春鈴桜は恐る恐る自分の髪を撫でた。

「・・・・・・・・・・・・サラサラ感が足りない・・・」

言葉と同時に先程よりもさらに表情が曇ってきている。

そして最後に春鈴桜が目をつけたのは天の、胸。
「・・・・・・・・・・・・・えいや」
「きゃあっ!?」
突然春鈴桜が天の胸をわしづかみにした、何がしたいんだこいつ。
しばらくわしづかみするとパッと手を離し、今度は自分の胸にそっと両手をあてた。
おそらく胸の大きさを比較したのだろう、残念ながら俺から見てもその差は歴然。天の方がでかい。
「・・・・・・・・・うぅ・・・・完敗です・・・・・」
唖然、絶句を超えついに涙目になった桜。
どうやら自分と天を全体的に比べていたらしい。
それにしても完敗か・・・大体予想はついた。
「顔も髪も胸も全部!そっちの方が上じゃないですかー!!」
おいおい身長を忘れてるぜ?
「ふぇぇん!!」
泣いた、高校生が泣いた。
「えぇ!?こ、これ私のせい!?」
オロオロ腕を回しながら混乱する天。お前はむしろ被害者では?
「おい、泣き止めよお前」
「お前じゃありません桜ですー!」
「じゃあ桜!早いとこ泣き止めって、恥ずかしくないのか?」
「恥ずかしいですよぉ!!」
やれやれ、これは当分泣き止みそうにないな・・・ほら見てみろ周りのみんながこっちをじっと見て・・・。
「ね、ねぇあれって会長さんを泣かした人じゃない?」
「あ、ああ俺も見た、たしか第一体育館にいたよな?」
「私違う体育館だったけど友達があいつに目つけられたってすごい騒いでたよ?何か目付き超怖いとか言ってた」
「あぁ・・・・・さっそく一人泣かすなんて・・・しかもあんな小さくてかわいい子を・・・」

・・・・・・・・あれ？俺のせい？
というかそれ以前にどんだけ広がってんだ俺の不良疑惑！？
それを悟った時、全員の視線が俺に向けられていることに気付いた。
最悪だ・・・せめて自分のクラスくらいは疑惑を消そうとしてたのに
「頼む桜・・・！早く泣き止んでくれ！そうしないと俺の不良疑惑がどんどん広がっちまう！」
俺は桜にだけ聞こえるように焦って言った。
「・・・・・・うぅ・・・・・ぐす・・・・ふぐ・・・・ん」
案外素直に泣き止んでくれた桜、しかし周囲の視線は未だに痛い。
とりあえずこの状況を考えると、全員俺が桜を泣かせたものだと思っているため不良疑惑が発生している。
おそらく俺がいくらみんなに違うと言っても全く意味はないだろう。
ならばどうするか、桜に言ってもらうしかない。
「なぁ桜、ついでにみんなに俺は不良じゃないって言ってくれると嬉しいんだけど・・・」
「・・・・・じゃあ毎日桜に昼食おごってくれるならいいですよ？」
「・・・なっ・・・・はぁ？」
「もしできないんならまた泣きます」
「わ、分かった！あんま高いものでなければ大丈夫だ」
「やった♪これで桜昼食代を払わずにすみます♪大丈夫ですよ、桜昼食はパン一個でたりるんで」
「分かった、じゃあ早いとこ頼む」
桜は一度だけうなずくとそっと席を立った。
「みなさん！この人は不良じゃありません！決して悪い人じゃありません！みなさんは見た目や噂だけでこの人を判断しようとしています！みなさんがそうやって自分達だけで人の価値を判断するからありもしない噂が流れていくんです！そんなにこの人が怖いですか！？恐ろしいですか！？だったら一回真面目に話してみてから判断するべきです！真正面から話してそれでも怖ければ不良扱いはして

もいいと思います！ですがもしもいい人だったらどうするんですか！？とにかくみなさん間違っています！みなさん全員・・・・・腐ってるよーー！！！・・・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・桜良いこと言いました・・・」

意外だった、会ってまだ間もない桜がここまでしてくれるとは思わなかった、正直超嬉しい。

息を整えながらそっと席に座る桜、視線が合った。

「桜良いこと言いました」

「二回も言うな・・・・まぁサンキューな」

「桜やるときはやりますよ」

少しいばった感じでふんっと自慢げに鼻をならす桜、あんなことを言ってくれた後では怒る気分にはなれない。

「あの、優人？・・・・・・なんかごめんね？私のせいなのに」

「気にしてないって、むしろこれで良かった気がする」

そう言いながら周囲を少し見渡すとほとんどの生徒が何かを話していた

「・・・・・・・た、確かに考えてみると相場君が不良って断言するにはちょっとね・・・」

「ああ、それに生徒会長を泣かしたとか言ってたけどあくまで噂であいつが生徒会長を泣かした瞬間は見てないからな・・・」

「見た目が怖くても優しい人ってたくさんいるもんね」

「俺達の勝手な行いで不良でない生徒を不良に仕立てあげるところだったのか・・・」

話している内容はそのようなことばかり

やった・・・！やったぞ・・・！！これでなんとかクラスではやっていける！桜、お前は俺の救世主だ。

「桜のおかげですね♪え～と・・・？」

「相場優人だ、ほんとにありがとな」

「え、えへへ～♪そ、そんな大したことはしてませんよ～♪でもまぁ？桜の手にかかればこんなクラスの一つや二つ操るのも容易いも

んですよ、それにやろうと思えばいつでも優人くんを不良に仕立てあげることだってできるんですからね～、それをやられたくなければ一生桜につくすことですね～♪哀れな狼に手をさしのべる、エンジェル桜とでも呼んでもらいましょうか」

前言撤回、やっぱりこいつかなりむかつく・・・！完全に調子に乗ってやがる！

「それにこの人助けは桜の始まりに過ぎません・・・桜の夢の第一歩なのです」

「・・・・・・夢？」

「桜はいずれこの学校の・・・・・・生徒会長になる女です！！」

「・・・・・・・・・・・・マジかよ・・・！」

まさかこの春鈴桜が三年間、共に生徒会を作り上げていく仲間になるとは知りもしなかった。

「表と裏のツンツンデレデレ」

クラスの顔合わせが名目のＨＲが終わり、今日はもう下校ということになった。
次々と荷物をまとめ帰っていく生徒達。
俺も荷物をまとめ下駄箱に向かおうと教室を出た瞬間、夢矢との約束を思い出す。そう、俺は生徒会に呼ばれていたんだ。
「優人、どうしたの？」
俺と一緒に下校するはずの天が後ろから声をかけてきた。この場でもう断っておく必要がある。
「・・・・・悪い天、先に帰っててくれないか？俺、ちょっと用事があんの思い出してさ」
「え？・・・・・・あ、うん・・・分かった、じゃあまた明日ね」
少ししょんぼりとした表情で天は俺の前から去っていった。
一緒に帰ることになったときすごい喜んでたからな・・・明日きちんと謝ろう。
「フフフ・・・どこへ行くつもりですか優人くん？」
いらんチビが来た。
「どこでもいいだろ？さっさと帰れよ」
「生徒会ですか？」
「な！？お前なんで知って・・・！？」
「あ、や、今適当に言ったんですけど・・・？え！図星ですか！？図星なんですね！？へぇ～、じゃあ優人くんも生徒会に入るんですか？」
「今日体育館で生徒会長に強引に入れさせられたんだよ、なんで俺なのかさっぱりだけど」
「へぇ～桜違う体育館だったんでそんなこと知りませんでしたよ、で結局生徒会に入っちゃうんですか？」
「まぁ特に入りたい部活とか委員会も無かったし、何より断れる雰

囲気じゃなかったんだよ・・・もともとやっていく自信はあんまなかったんだけどお前も入るんだと思うともっと自信なくしたな」

「どういう意味ですかそれ!!」

「というかお前は進んで入るんだろ?なんたって生徒会に・・・」

俺の言葉に桜はすぐさま怒りを抑え、俺の前に乗り出した。

「桜中学時代アイドルとか言ってましたけどあれ半分嘘です、桜実は一部の生徒からいじめられてました・・・きっと桜のあまりの人気に嫌気がさして妬み始めたんでしょうね、いじめ自体は別に気にしてませんでした、ドラマとかでやってるようなリアルいじめじゃなかったんで全然平気でした・・・でも一番傷ついたのは誰も桜を守ってくれなかったことです、生徒会、教師、クラスメイト・・・相談とかには乗ってくれるんですけど実際いじめられてる時に助けてくれた人は一人もいませんでした!あの時の思いは・・・ちょっと忘れかけですけど忘れません!だから桜誓ったんです!自分が高校生になったら生徒会に入って全ての困ってる生徒さんを助けるって!!」

その時の桜の顔は夢を追う少女そのもの、目が恐ろしいほど輝いている。

どうやら桜が受けたいじめはトラウマのようなものではなく己の道を切り開くための足掛かりとなったようだ。

実際忘れかけということはそれほど気にしていないということだ。

「なるほどな、だからあの時俺を助けてくれたのか・・・」

「ふふ♪感謝してくださいね~♪」

「そのわりにはお前俺に変な要求してきたよな?毎日昼おごれとかなんとかって・・・・・・」

「!・・・そ、それは・・・」

「それは?」

「な、なんとなくその場のノリで・・・みたいな?」

「いい身分だなアイドルさんは」

さすがに少し怒りが込み上げた俺は桜の頭を掴むと髪をぐしゃぐし

ゃにかき始めた。
「いだだだ!?いだい!いだいです優いだだ!!」
「・・・意外と楽しいな、これ」
「えぇぇ!?そんな変な趣味に目覚めないで下さいよ!」
「ああ、お前がなんで中学の時いじめられてたかよく分かったよ、いじりやすいんだよ」
「ぬぐぅ!しかし桜この程度ではくじけませんよ!いずれ生徒会長となる運命ならこんな不良一人に負けてるようでは威厳と言うものが!」
「不良言うな」
「いだだだ!!抜けます抜けます!髪の毛抜けますぅ!」
「安心しろ、もう何本かとっくに抜けてるから」
「なにやらかしてんですかぁ!?ああ、神より与えられし桜の崇高な髪が~!!・・・・・・・・・・・「かみ」だけに」
「・・・・・・」
突然の桜の下らなすぎるダジャレに一気に気が失せ、俺は桜の頭から手を離した。
「・・・え?ちょ、いきなりやめないで下さいよ!なんかものすごくすべったみたいじゃないですか!?」
「安心しろ、みたいじゃなくてすべったんだよ。今時神様の神と髪の毛の髪かけるやつがいるなんて・・・・・・・くく・・・!こいつは今までに例がないな」
「・・・・・!!!」
桜がものすごくどんよりとした顔になっているがそこは気にしない。
「むかつきました!桜優人くんが不良だって学校のみんなに言いふらします!!!」
やはりきたか・・・しかし今日こいつといたなかで桜が予想以上にバカだということが判明した、だからそれを利用して・・・
「いいのか?」
「な、何がです?」

「もしもお前がそのことを他人に口外したら俺もお前の「アレ」をみんなに話しちまうぞ？」
「！！！」
無論「アレ」なんてものはない、しかしこの桜だ、隠し事の一つや二つ持っていてもおかしくはない。
「ま・・・ま・・・まさか優人くん・・・・・・私が今でも誰かと一緒じゃないと夜寝れないの知ってるんですか！？」
自分から言っちゃったよ
「ああ、知ってるさ！」
「夜に絶対トイレ行けないこともですか！？」
「余裕で知ってるな」
「たまに足し算をど忘れすることも！？未だに自分の名前以外漢字が書けないことも！？ジャングルジムに乗れないことも！？好きな食べ物より嫌いな食べ物の方が多いことも！？将来ボンッキュッボンッなセクシーボディになりたいとか全部ですか！！？」
「あ、ああ・・・・知ってるぞ・・・？」
俺の想像を遥か上回るバカだった・・・・・・
というか聞けば聞くほど桜が子供にしか思えない・・・年齢偽ってるんじゃないか？
完全に自爆した桜はその場で膝をつき真っ白に燃え尽きた。
「う・・・・うぁぁ・・・・・桜もう生きていけません・・・・・」
「安心しろ桜、お前が俺の不良疑惑を常に訂正してくれるんだったらお前の秘密全部黙っててやる、だが俺を不良だと他人に口外した場合どうなるか分かるな・・・・？」
俺の問いに桜はぶんぶんと首を縦に動かした。
相当ばらされたくないらしい・・・俺だって桜の立場だったら必死になるさ。
「よし！ならお互い様だ！俺も約束を守る、桜も約束を守る、それでいいな？」
ぶんぶんぶんぶん、めっちゃ必死。

単純な奴・・・少し悲しくなってくる。
「よし、それじゃあ生徒会室に行くか」
「でも優人くん、生徒会室の場所って分かるんですか？」
「なに言ってんだよ、こういうときのための地図だろ？」
俺はポケットにしまってあった神騎高校内の地図を取り出すとその場で広げ生徒会室を探した。
「・・・・・・・」
生徒会室、生徒会室、生徒会室・・・ない・・・地図が細かすぎて生徒会室を発見することができない。
「ね？分からないでしょ？桜もさっき見たんですけどもうさっぱりでしたよ」
「大体俺達のクラスどこだよ・・・現在地さえ分からないじゃないかよこの地図」
それもそのはず、国内最大規模の神騎高校だ。教室の数が星の数ほどある。
それを自分の手で広げるサイズにまで縮小したのだ、眼鏡の人絶対文字見えないぞこれ・・・。
「う～ん、どうします？」
「どうしますって・・・あっ」
「どうしたんですか？」
「あいつ・・・」
俺達の前方にあった階段を一人の赤髪の生徒が上がっていった。
あの長い赤髪、間違いない、生徒会副会長の沙奈だ。
沙奈ならきっと生徒会の場所を知っているに違いない。
「桜、行くぞ」
「え、えぇ！？どうしたんですか～！？」
俺と桜は生徒会室に向かうべく、生徒会副会長・藤村沙奈を追うことになった。
断じて、断じてストーカーではない
「沙奈！」

ようやく沙奈に追い付いた俺達は後ろから声をかけた。
沙奈はその独特の長い髪をふわりと揺らしこちらを振り向いた。
「・・・何だ、あんただったの？驚かさないでよね」
今日の朝もそうだったがどうもこの人は常にムスッとした表情をしていてしかも何か無愛想、でも正直怖くはない・・・俺より背低いし。
「別に驚かすつもりなんてないって、ただ少し聞きたいことがあって」
「どうせ地図が読めないとか、道に迷ったとかそんなんでしょ？」
「あ、ああ・・・よく分かったな」
「　あたしも一年の頃よく迷ってたし、過去一回学校出口がわからず学校から出れなくなった日もあったくらいよ・・・それで？ここにいるってことはもう今日の授業は終わったって感じ？」
「ああ、だからこのまま生徒会室に行こうと思っててさ」
「ふーん・・・ところでその子誰よ、さっきからあんたの足ずっと蹴ってるけど」
沙奈は少し怪しげな表情で俺の隣にいた桜を見た。
今までずっと無視していたがこの桜、さっきから沙奈を見つめたまま俺の足を必要以上に蹴ってくるのである。
「何様だお前」
俺はすぐさま桜の頭をつかむと再び髪をぐしゃぐしゃにかきはじめた。
「いだだだ！！痛い痛い！痛いですー！！」
「当たり前だ、痛くしてんだからな」
「ごめんなさい！ごめんなさい！！」
意外と素直に謝ったので俺はすぐに手を離した、また髪が数本犠牲にされてしまっていたがあえてそこは気にしない。
「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・まさに全自動究極暴力装置」
桜はやまんばのように荒れた髪を整えながらさりげなく挑発的なことを言ってきた。

「もう一回やってやろうか？」
「や！もう勘弁してください！！ですが優人くん！桜はなにも理由なしに優人くんの足を蹴っていたわけじゃありません！」
「なんだよ理由って」
俺の言葉を耳にした瞬間桜はビシッと沙奈に向かって指差した。
「控えろ～控えろ～！このお方をどなたと心得る！恐れ多くは神騎校生徒会副会長、藤村沙奈様おおせられるぞ～！！ババーン！！」
桜は何故か誇らしげに沙奈に向かって両手を広げパチパチと手を叩き始めた
「暴力装置、頭が高い！控えろ～！！」
完全にあのドラマのノリに引き込まれてしまった桜、うざくてたまらない
「どうしたんだよお前」
「どうしたもこうしたもありませんよ！桜きちんと聞いたんですよ！優人くんが沙奈さんのことを「沙奈」って呼び捨てにしたことを！！」
「あ～それか」
「知りませんでした・・・まさか優人くんが沙奈さんともうそんな関係になってしまっていたなんて・・・沙奈さんと付き合いたいがためにどれほどの男子生徒さん達が奮闘したことか・・・」
なんで俺はこうも誤解されやすいのかね・・・
「優人くんは沙奈さんのことをどれくらい知ってるんです！？ちなみに桜はすごいですよ！生徒会副会長、藤村沙奈！通称「沙奈ぽん」！もはやその名前と顔を知らない生徒はこの学校には存在せず全生徒から圧倒的な指示を集めている実力派！！むっつり顔で態度がでかいわりに体は小柄で声もとてもかわいい！しかもツンデレ！！学校内で沙奈さんに萌えない生徒は数えられるほどしかいないほど！しかもしかも趣味はバンド！好きなものは小さくてかわいいもの！！家には大量のぬいぐるみが家を占領しているほどです！さらに中学時代までキックボクシングを極めていたため戦闘力は学校一位二

位を争うほど！！かっこよさかわいさ強さを秘めたまさに万能な女の子なのです！！・・・ちなみに下着の柄はかわいい猫のうぐっ！」
桜が話している途中、刹那の速さで沙奈が桜の口を強引に押さえた。
理由は簡単、喋りすぎだ。
「あんた・・・！それ以上話したらぶっ飛ばすわよ・・・！！」
恐ろしくひきつった表情で沙奈は桜の頬をぐいぐいと押さえていく
「あふ・・・ほぺんなはい（ごめんなさい）・・・！！」
「・・・ふん！」
沙奈は乱暴に掴んでいた手を離すと腕を組みぷいっとそっぽを向いてしまった
「沙奈・・・」
「・・・な、何よ・・・！？」
「お前って結構少女趣味なのか？」
「な！？ななな！？そんなわけないでしょ！？仮にもあたしは高校生なのよ！？いい歳にもなって小さくてかわいいものが好きだなんて嘘に決まってんでしょ！？し、下着だって普通のやつよ！！別に変な柄なんてなんもついてないんだから！！」
そっぽを向いたと思ったら突然振り向きこの慌てよう・・・別に下着まで聞いた覚えはないのだが・・・
「ていうかあんた！！そんな情報一体どこで・・・！？」
「え？知らないんですか？沙奈さんファンクラブの筆頭が創設した「沙奈ぽん萌え萌えブログ」に全部書いてありましたよ？沙奈さんの日常とか沙奈さんの悩みとか沙奈さんの今日の下着の柄とか！総勢３０００人を超えるファンの方達が日々沙奈さんの素晴らしさを語っているのです！ブログというより掲示板に近いかもしれませんね～もちろん桜もその一員かつ新入生第一号なのですよ！！」
腰に手をあて、えっへんと鼻をならす桜
「さ・・・・・沙奈ぽんブログ・・・？」
「愛されてる証拠ですよ！ね♪・・・さ・な・ぽん♪♪」
「ふ、ふざけんじゃないわよ！！あ～もうあったまきた！！あんた

らなんかに生徒会室の場所なんて教えてやんないんだから！！」
「え？俺はなにもしてなくないか！？」
「うっさいバカ！！あたしの秘密知った以上あんただって同罪よ！あんたら二人はそこで一生迷ってなさいよね！！このバーカ！！」
顔を真っ赤に染めながら言うだけ言ったあと沙奈は俺達に背を向けるとそのまま歩きだしてしまった。
「ついてきたらぶっ飛ばすわよ！！このバカ！！」
一瞬振り向いたと思ったらこの暴言、しかし何故だろう・・・全然怖くもないし悔しくもない。
沙奈は早歩きで廊下の角をさっさと曲がっていってしまった。
「・・・桜、お前本当にあいつのこと尊敬してんのか？」
「してますよ？」
「今この状況になって・・・お前があいつのこと尊敬してるようには到底思えないんだが」
「桜は沙奈ぽんのことを知り尽くしているからあんなことが言えるんですよ、優人くんはまだ分かっていないんですよ、ツンデレというものをね」
沙奈のことをもう「沙奈ぽん」などと言ってしまっている時点で敬意の欠片も見当たらない。
「大丈夫です！沙奈ぽんは必ず帰ってきます！必ず！」
その自信は一体どこからくるのか・・・とりあえず桜の言うことを信じて言われた通り待っていると数十秒後、先程の廊下の角からひょこっと沙奈が巣から出てくる小動物のように顔を出した。
本当に帰ってきたよ、あいつ。
沙奈は顔を赤くしながら妙にもじもじとした態度でチラチラとこちらを見てくる、なんなんだ？
「つ・・・ついてこないの・・・？」
「いや、だって、ついてきたらぶっ飛ばすって言ったじゃないか」
「あ、あんなの嘘よ！べ、別についてきたって構わないんだから！というかさっさとついてきなさいよ！！このバカ！！」

なんで毎度毎度こんな理不尽に怒られなければならないのだろうか。
沙奈は再びそっぽを向くと角の先に行ってしまった。
「見ましたか！？見ましたか！？優人くん！！」
「あれがツンデレってやつなのか・・・？」
「そうですよ～！というか反応低いですね優人くん、ツンデレには萌えないタイプですか？」
「ツンデレはもちろん他のにも萌えねーよ」
俺は吐き捨てるように言うと沙奈の後を追うかたちで歩きだした。
少したったあと後ろから「ダメダメですねー、優人くんは」と桜のふざけた言葉が聞こえたがあえてスルーした。
沙奈に追い付いた俺達は彼女の後ろにつき後をついていくことにした。
「きゃー！沙奈様～♪♪」
「今日もかわいい～♪♪」
「こっち向いて～♪」
どこからともなく現れた女子生徒（多分先輩）が次々と沙奈に対し言葉をかけてくる、まるで世界のスターが歩いているかのようだ。
しかしもちろんそれは沙奈だけであって、俺と桜には妙な視線が送られてくる。
あえて言葉にはされなかったがきっと快くは思われていないだろう。
沙奈のファン（？）の嵐から抜けると一気にがらんと人がいなくなった。
周囲の教室の札を見ると「資料保存室」や「工具室」や「裁縫室」などなど、普段生徒が使わないような教室ばかりが並んでいる。
そんな時俺は妙な教室を見つけた。
「科学研究室・・・？」
札にはそう書いてあった。
「ああ・・・ここね、絶対入らない方がいいわよ？きっと大変な目にあうから」
「・・・・・・あ、ああ」

疑問を抱きつつも俺は歩みを進めた
その教室の秘密を知ることになるのはそう遠い話ではないということをこの時の俺はまだ知らなかった。

「跳べ！桜！！」

「生徒会の役員になるからには生半可な気持ちでいてはダメ、常に信念を貫いて行動し自分の気持ちに正直になること、そして物事を冷静にかつ確実に判断して周りを引っ張っていく必要もある・・・過去の生徒会の役員達はそれらを前提にしてさらに高みを目指して行動していた、だからこそ現生徒会のあたし達も遅れを取るわけにはいかないのよ！覚えるべきことはなるべく一度で覚え、犯した失敗は最大限まで原因を追求しそれを後の行動に生かす！それを繰り返していれば人間というものは次第にできあがっていくものよ、そもそも人間には・・・・・・」

現在生徒会室へと向かっている俺と桜は沙奈に頼んで生徒会室まで連れていってもらっている。

正直なところ、今の俺は若干疲弊していた。

理由は簡単、先程からずっと沙奈が生徒会の掟やらなんやらを休む間もなく話してくるのだ。

聞かなければ聞かないで楽なのだが下手に話を聞き逃すと沙奈が「あんた真面目に聞く気あんの！！？」と怒りだすため、絶えず話を聞いているのである。

しかしそんな俺とは裏腹に、桜は熱心に俺の隣で自身のメモ帳にメモをとっている。

途中何度かうんうんとうなずきながら何ページも何ページもメモしていく。

将来生徒会志望の桜にとっては生徒会副会長の話は重宝すべきものなのだろう、もっとも、もともと入る意思のなかった俺にはただの疲れる話でしかないが・・・

「生徒会に入ったが最後、よっぽどな理由がない限り抜けることは不可能よ・・・分かってるわね優人？」

「え？そうなのか？」

「あんたは異例すぎるわ、会長権限で無理矢理入らせれたんだから、夢矢に気を使ってるんならやめた方がいいわよ？入りたくないんだったら入りたくないってちゃんと言いなさいよ、あたしにだって権限くらいあるんだから」

「・・・・・ん～・・・そう言われてもな、もう覚悟は決めたし今更断るって言うのも男としてどうかと思うし・・・訂正はしない」

「・・・・・あっそ・・・ならいいけど」

沙奈はちらりと一瞬こちらを振り向くとすぐにまた前を向いてしまった。

口ではああ言ったが、心のどこかでは夢矢に気を使っているのかもしれない。

それ以降沙奈は何も喋らずに黙って歩き続けた、代わりに度々桜が俺に話かけてくるようになった。

しかし話しかけてくる内容は下らないものばかり、好きな人はいるのかとか苦手なものは何かとか最近むかついた話とか（これは素直に桜と答えた）天との関係などなど・・・質問攻めも楽じゃない。

「それにしても・・・・・・・遠いんですね～生徒会室って」

突然隣にいた桜が情けない言葉を出した。

そう、先程から大分時間はたったはずなのだが一向に到着する気配はないのだ。

「情けないわね・・・そんなにだるいなら近道でもする？」

「近道？」

「そ、あたしが見つけたルートよ、そのルートで行けば普通に行くよりも十倍は速く到着するわ」

「そんな近道があったならさっさと教えてくれも良かったんじゃないか？」

「確かにそうだけど・・・あんた達命は落としたくないでしょ？」

「・・・・・・は？」

「まぁいいわ、そっちのルートで行くことにする・・・ただし、少し覚悟はしておきなさい、あと準備運動もしといた方がいいかもね

？」
「？？？」
沙奈の言っていることがさっぱり分からなかった。
それは桜も同じだったらしく首をかしげ疑問詞を浮かべている。
「こっちよ」
突然沙奈は方向転換すると近くにあった階段を上がり始めた。
言われるがままに沙奈についていく。
「？？？」
少しだがとある異変に気づいた、先程から階段しか上がっていない気がする、途中の階の廊下を歩くこともなくただただ上に向かっていっている。
そして案の定・・・・・屋上についた。
くっきりと浮かんだ太陽がてりつけ、涼しい風が肌に触れる。
「え・・・・と？ここ屋上だぞ・・・？」
「そうだけど？」
「近道は？」
「だから・・・屋上が近道よ」
「？？？」
「この神騎高校はその巨大さゆえにいくつもの校舎に分かれてるの、その校舎を繋ぐ通路が設計上の都合で決められた場所にしか設けられていないのよね、その通路は一階だったり三階だったり無茶苦茶なわけ、でも幸い校舎と校舎の間隔はとても短いものが多いから屋上からつたっていけば簡単に既望の校舎に行けるってこと、分かった？」
「理由はわかった・・・それで、その間隔ってのはどれくらいの距離なんだ・・・？」
「そうね、校舎によって異なるけど、大体3メートルくらい？」
「も、もしも落ちたら・・・？」
「死ぬに決まってんでしょ？」
「・・・・・」

軽々と口にした言葉に俺は思わず固まった、死ぬって・・・冗談じゃない。
さっさと前に進んでいく沙奈に戸惑いながらもついていく。
そして屋上の端につくとすぐに下を向いた。
た・・・高い・・・
運がよければ骨折で済むとかそういうレベルではない、運が良かろうが悪かろうが確実に待っているのは「死」一つだけだ。
チラリと後ろを見ると少しずつ少しずつ後方に後ずさりしてる桜がいた。
すぐさま俺は桜の制服の襟をつかみ元の場所に引き戻す。
「なに逃げようとしてんだお前」
「むむむ無理ですぅ!!絶対無理ですぅ!!桜こんなところで死にたくありません!まだ見ぬ遊びが!まだ見ぬ出会いが!まだ見ぬ世界がまだ見ぬ未来が〜!!」
ギャーギャー泣きわめきながら必死に俺の手を振りほどこうとする桜。
桜の言うことはもっともだ、下手して足でも引っかければ間違いなくお陀仏だ・・・
「ふ〜ん?あんた達はこんぐらいのことで参っちゃうのね?勇気を振り絞ってやればどうってことないのに・・・所詮はその程度の覚悟だったってわけね、あ〜あ、残念」
「・・・・・・・・」
「ほら、さっさと帰りなさいよ・・・この腰抜け」
「だ〜〜!!ちくしょう!そんなに言われて男として退けるか!俺はやるぞ!こんくらいやってやるよ!!」
とはいえ今の校舎から隣の校舎までの間隔は俺が見る限りでも二メートル以上は離れている、普通にジャンプして届く距離ではない。
「・・・沙奈はいつもどんな風にここ跳んでるんだ?」
「どんなって普通に・・・」
そう言って沙奈はその場から十歩ほど後ろに下がると目にも止まら

ぬスピードで走り出した。
「！！」
しっかりとかかとで地面を蹴りそのまま大きく跳躍した。
「跳んでいる」というよりも「飛んでいる」ように見えた。
一瞬にして沙奈は二メートル以上もの距離を跳び、空中で一回転すると綺麗に足から着地した。
その間にスカートの中が見えてしまったがそこはノーコメントということにしておこう・・・
「ほら、あんた達も速く来なさい」
「あ、ああ」
再び下を見つめる、高い・・・しかしここは男として退くわけにはいかない！
俺は少しずつ少しずつ後方に下がり走る態勢に入った。
こうなったらもう勢い任せに跳ぶしかない、そのためにはこの短距離でいかに全力疾走できるかが鍵となる。
「うぉぉぉぉお！！」
とにかく全力で、周りなど気にせず正面の景色だけを突っ切っていく。

そして跳んだ

その時俺は何を考えていたかよく覚えていない。
なんかこう・・・とにかくがむしゃらだった。

ドンッ！

「いでっ！」
着地に失敗し前回りしながら背中を強打したものの、なんとか渡れた。
「・・・・・い、行けたのか？」

「行けたのかっていうか余裕じゃない」
驚いたことに俺は校舎と校舎の間を簡単に飛び越し、その数メートル先で止まっていた。
思ったより簡単だった・・・のかもしれない。
「さてと、次はあの・・・・・」
沙奈が向こう側の校舎の屋上にいる桜に目線を合わせた。
俺も所々痛む体を起こし、桜のいる方角を見た・・・そこにいたのは。
「あ、ああ・・・・あぁぁぁぁ・・・・・あぁぁぁ～・・・・・！」
今にも泣き出しそうな桜がこちらにＳＯＳの眼差しを送ってきていた。
その姿は親に置いていかれた子供そっくりだ。
「桜、お前も早いとこ来いよな！案外行けるもんだぞー！！」
俺が声をかけるも桜は首をぶんぶん横にふるだけで一向に行動に出ようとはしない。
「お前は生徒会長になるんだろー！この程度の試練乗り越えられずに生徒会長なんて務まると思ってんのかー！！」
「！！」
桜が突然ピンッと顔を上げた、どうやらやる気にはなってくれたらしい。
それほどまでに生徒会長という目標が大きいのだろう。
「さ、桜やります！！やってみせます！優人くんにできて桜にできないわけがありません！！」
あいつの中じゃ俺はあいつより下なのか・・・
だがそれがやる気の歯車を回してくれるなら別に構わないが・・・
「う、うぅ・・・・・・」
助走のため後方に下がる桜、しかしまだほんの少し恐怖心があるようで足が若干震えている。
しかし桜は恐怖を振り払うように首をぶんぶん横にふるとキリッとした顔で正面を見つめた、覚悟はできたらしい。

「桜、行きまぁぁぁぁすっ！！」
俺と同様がむしゃらになって走り出す桜。
十分な助走をつけ思いっきり跳んだ。
空中を鳥のように舞う桜・・・残念ながらそれは一瞬の煌めきだった。
あと数センチと行ったところで桜の体が真下に落下した。
「いやぁぁあっっっくぁあああああおばぁあ！！！！！」
断末魔を越える叫びをあげる桜、しかしギリギリのところで桜の腕を沙奈が掴んだ。
「くぅ・・・・・・！」
急いで掴んだせいで沙奈は片手しか出せなかったらしくギリギリとかかってくる片手の重みに苦汁の表情を浮かべている。
状況的に・・・俺が行くしかない
「さようならみんな！さようなら桜のゲーム！さようなら桜の一巻ずつしかない漫画！さようなら買った日に川に落としてそのまま流された恋愛小説！さようなら一日に桜の私物を一つは盗むお姉ちゃん！さようなら毎年全てのお年玉を勝手に銀行に預けるお父さんお母さん！さようなら沙奈ぽ～ん！さようなら優人く～ん！！さようならみんな～！」
「あ、あんたね！そんなバカなこと言う暇あったら少しは生きる努力したらどうなのよ！このバカ！！」
「もういいです～！離して下さい～！！桜今日からお星様になりますから大丈夫です～～！！」
「あ、あんたねぇ！！」
「沙奈、後は俺がやる！任せてくれ！」
沙奈がつかむ横で俺は両手で桜の腕を掴んだ。
「あんた・・・！落としたら殺すわよ！」
「安心しろよ、俺は信じる価値のある男だ！」
「・・・」
沙奈は何かを悟ったかのようにそっと手を離した。

そのせいで少し重みは増したものの、結局相手は小学生サイズの桜のためどうということはない。
「桜！行くぞ！！」
「は！はいぃいいい！！」
「うをぉぉぉおおおらぁああ！！」
何か大きなものを引っこ抜く勢いで腕を振り上げるといとも簡単に桜が再び宙を舞った。
「あぐ！！」
そしてそのまま顔面落下、見るからに痛そうだ・・・・・
「お、おい！大丈夫か桜！」
俺がかけよると桜はよろよろと体を起こした。
「桜・・・・・生きてます！！」
その顔は痛みに苦しむ顔でもなければ怒りに震える顔でもない。
とても、とても清々しい表情だった。
あんなに泣き叫んでいながら心のどこかでは諦めていなかったのかもしれない。
俺はきっとその時の桜の顔を忘れることはないだろう・・・・・・
鼻血さえでていなければ・・・
「桜、ほらティッシュだ」
「はう・・・鼻血で済んだんならいい方ですよ」
「あんたたち・・・よくやったわね、正直驚いたかも」
珍しく沙奈が少しではあるが笑っていた。
「沙奈・・・」
「ちなみにあともう二、三回跳んでもらうからがんばってね」
「・・・は？」
「生徒会室がすぐ隣の校舎にあるなんて言ってないでしょ？」
「「えええええぇぇぇえ！！？」」
俺と桜の悲痛の叫びが響き渡った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9472v/

俺の学校の裏世界

2011年12月12日23時46分発行